

五郎は濡鼠の如く濡れたま、動かなかつた。

「先生、」と柳小は家の中から聲を掛けた。

「柳小」と五郎は家に駆け入つて柳小の手を握り、「お前は淋しくとも此處に待つて居るか」

「何處へ行くの？」と柳小は訊いた。

「僕は黄州まで行つて来る。待つてくれ」

柳小は首肯いた。そして四邊の暗さを振返つて見た。

「恐いか」

「い、え」

「淋しいか」

「い、え」

「一人で待つて居られるか」

「朝になつたら明るくなりますから」

「爾だ、朝になれば明るくなる」と五郎は力を込めて「待つて、くれ、屹度歸つて来るから」

五郎は柳小を突放して矢の如く走り出した。雨と泥濘の中を轉びつ倒れつ彼の胸は只だ生みの父の安否に躍つた。

「多分黄州の線路だらう。楠總督の乗つてる汽車をねらつてるに違ひない」

凡そ二時間ばかりは夢の如く馳けた。彼は少しも疲れなかつた。高粱が次第に淺くなつた。

雨は漸やく止むで雲間から星が瞬いて見へた。鼠色の天の前を眞黒な雲が鬼の如く龍の如く怪

獸の如く過ぎて行く、風が出たと見へて雲脚が早い。

「何處へ行たらう」と彼は四方を顧みた。其れらしき影もない星明りに透して時計を見ると八

時を過ぐる三十分餘りである。九時には汽車が通過するのだ。爆弾が一闪すれば無数の乗客と

共に楠侯爵其他の文武官が惨死するのだ。慙う思ふと彼の胸は波打つた。

「事が成功しやうとも不成功に終らうとも生みの父は虐殺の大罪人となるのだ。若し成功すれ

ば其の罪が更に大きい」

彼は纔に遠くの右手にシグナルの紅い光を認めた。

「線路だ」と彼は思はず叫んだ。と見ると其の線路の眞中に蹲んで居る二人の人がある。二人

は手を以て砂利を掘つて居る。掘つた砂利は音せぬ様に布に入れて今一人の男が其れを遠くへ腹這ひながら運ぶ、と一つの匣が穴の中に埋められた。

「爆弾だ」と五郎は思った。此時彼は今一人の男が軌道に耳を着けて遠くの音を聞いて居るのに気が付いた。頭から被つた黒羅紗の外套頭巾の中から白い髯が露はれて居る。「御父さんだ」と五郎は思った。そして其の方に走り寄つた。

六

楠大將が朝鮮全道を視察するといふ噂は去年からの事であつた。だが其れは噂だけに止まつて實行されなかつた。其れは伊藤侯が不慮の難に斃れた前轍に鑑みたので、若し今度も爾いふ事があれば日本の國威に關する事が極めて大で、従つて不逞の徒が一時に日本の警備機關を侮り左なきだに刻々に催し來れる低氣壓が俄然として爆發するであらうと氣遣つたのであつた。

これには楠大將は不服であつた。彼は武斷一方の政治家で未開の民——特に無定見の韓民

に對しては武威を以て壓服するのが第一であるといふ主張を有つて居る。

「生命を惜んでは國家の經營が出来ぬ。戦場で死ぬも暴徒に射殺されるも皇國のためなら同じ事ぢや」

實際大將は青年の時から一命を國家に捧げたので其の忠烈なる點に於ては何人も拵むものはない。併し忠烈は忠烈でも國家百年の計のためには威服よりも徳化が主である事に氣付かなかつた。

「木戸大久保は何だ。刀刃を恐れて何が出来るか」

上戸は酒より美味しいものはないと言ひ下戸は菓子より美味しいものはないと言ふ。武人としての楠大將が武斷一方に偏するも止むを得ぬ事であらう。

「私は堂々と全道を巡視するぢや、そこで不逞の徒に私の威風に服するだらう。今まで引込んでばかり居たから韓民共が總督府を侮るのぢや、私の髯面を八道の風に曝らして見せたらそれで天下泰平ぢや」

彼は左右の諫止を聴かなかつた。彼は強てものくしき軍隊を率うるを止めた。併し文武官

屬僚各局長、警部長、憲兵隊長等だけでも隨行員は略々五十名に達した。彼は大邱に行き勝風嶺を過ぎ大田、牙山水源を巡視した。到る處、歡迎の聲が湧いた。暴徒らしいものは一人もなかつた。

「どうだ、私の思ふた通りだらう」と彼は人々に誇つた。そこで彼は直ちに北韓に向つた。大江を隔て、南北に区分すると南は文化に近く、其の人民は概ね優柔にして且つ懦弱であるが、北の人民は標悍にして霸氣に富んで居る。其れは兩方の山を見ると明かである。江の北に聳ゆる山々は岬嶽峻惡であるが、江の南の山々は恰ら京都の山に似て優麗圓滑を帯びて居る。不逞鮮人の出沒する處は蓋し北韓である。此の點からして警察及び憲兵隊は水漏る隙もないばかりに警戒した。

「そんなに嚴重にせんでも宜しい。どうせやられる時はやられるからな」と總督が言つた。

「總督も此頃は平民主義になりつゝ、ある」と秘書官共が噂し合つた。實を言ふと是れは大將の一種の矜持で、警戒を嚴重にした爲めに無事であつたのでは自分の威力が役に立たない事を證明する様なものだから、なるべくは開放的にして我が徳化の大なるを天下に示したいのであつた。

た。其れがために特別仕立の汽車を止めて一般の汽車に乗る事にした。

汽車の特別車には總督を中心に數多の文武官連が圍繞して盛に葉巻の煙と氣焔とを吐いて居る。其等は多くは老人に近い方の人達で二十年間官界を游泳して能く上官の詰らない功名談を欠伸もせずに聞く事に馴れてる人が多かつた。談話は日清戦争の當時に及んだ其れは楠大將が最も得意とする武功談の一幕で、人々の中には既に十回餘も同じ談を聞かされた者もあつた。「私には天佑がある」と大將が顎を撫で、言つた。而して鳳凰城乗取の段に移つた。天佑といふのは帽子の庇に彈丸が二つ程當つたといふだけであつたが、此の貴重な英傑の帽子に彈丸が當つたといふ事は如何にも勿體ないと人々に思はした。

七

「其れに私ばかりでない。私の馬ぢや、副官君も知つてるあの望月ぢや」

「はい、立派な馬でございました」と副官は指名された光榮を感じつゝ、誇り顔に言つた。實は此の男は大將の此の話の全部を暗記して居るので、君も知つてるだらうあの望月ぢやと來る

だらうと待ち構へて居たのであつた。

「あれが其の六ヶ所に弾丸を受けて居たが少しも傷が付かなかつた。ほんの擦過傷でな」

「矢張り閣下の武運にあやかつたのでございませぬ」と書記官が感嘆して言つた。

「死を恐れると死神に付かれるぢや、私の様なものは助ける神もない代りに殺す神もないと見

へる」と大將は笑つたが此時書記官の葉巻の煙がもやくと其の顔に迫つたので大將は手を以て拂つた。書記官は慌て、自分の帽子で煙を追ひやりながら急に背後の窓を開けたが雨が吹き入るので又慌て、閉め出し到頭葉巻を喫壺に捨てた。而してきまり悪さうに見廻した時、三番目に坐つて居た警部長は居眠りから覺めて「なる程、實に、いかにも」と話を聞いている様な振をした處であつた。一同は笑つた。

「御疲れぢやらう。汽車の中だけでもせめて眠るが可い」と大將は言つた。警部長は益々恐縮して「實に申譯がありません」と頭を低れた。

「大將も仲々人心收攬術が巧い」と書記官は感服した。

隣の室は若手ばかりであつた。噂は矢張り大將の批評やら暴徒鎮壓策で持ち切つた。

「伊藤侯が生きて居たら必ずもつと成績が擧がたらう」と顔の長く青い前々代からの屬官が言つた。彼は伊藤侯が唯一の崇拜する人物であつた。

「宿屋へ行くにも丸腰で行くんだぜ、宿屋の若者が御室の庭の外を鼻唄で通つたのだ。すると侯爵が呼び止めて、もう一返唄つて聞かせ中々面白いと所望に及んだのだ。其の後楠大將が此の宿に御泊りになつたもんだから奴さん又賞められやうと思つて特別の聲を出して唄つたもんだから大目玉を食つて女將までが散々の御叱言だよ。何しろね伊藤侯は粹な政治家だつたよ其の時の巡査は今の様な人間が一人も居なかつた。

「今の巡査は不可いかね」と憲兵大尉は忌々しさうに言つた。

「あ、不可いとも、人情を知らない。人民を吐るばかりで優しみが無い。僕が總督なら第一に巡査を改革する。少くとも大學卒業生位を巡査にする」

「酷く巡査に崇るね」と事務官が笑つた。實は此の屬官はつい二三箇月前に酔つて往來で鼻唄を唄つたので巡査に目玉を食つたので其の遺恨が骨髓に徹して居るのであつた。

「君は社會黨だ」と大尉は言つた。大尉の見解に依ると社會黨ほど悪い者はなく社會黨ほど憎

むべきものはないのである。

「大尉君」と屬官は言つた。「君は僕を罵倒した積だらうが僕は君に罵倒された事を非常に嬉しく思ふよ。如何となれば君と僕とは頭腦が差つて居る事が解つたからだよ」

大尉は此の新しい言ひ廻しを諒解する事が出来ない。「爾でありますか」と軍隊式に答へたので、一同はわつと笑ひ出した。

向ふの隅には五六人の一團が窓から首を出して居た。雨が霽たので星の光が特に美しく見えた。

「これだけ高粱を刈取れば奴等が出没しても直ぐ一と目に見えるね」と一人が言ふ。

「爾だ、高粱といふ奴は實に困るからな」

「だが向ふは中々伸びて居るぜ、なぜ刈らないんだらう」

「雨漬きだからなあ」

「僕が彼奴等なら彼の邊に爆裂弾を仕込むね」

「物騒な事を言ふなよ」

汽車は闇の野面に火の粉を飛ばして勢ひよく駛つて居る。

八

鐵軌に耳を着けて居た李翁は急に立つて片手を高く舉げた。三人の者は矢の如く走つた。而して高粱の中に隠れた。李翁は黙つて一條の綱を曳きながら極めて静かに、高粱の中を潜りつ、歩いた。而して凝と耳を敏てるもの、如く天を仰いだ。此の時彼は人の足音を聞いた。彼は愕然として言つた。

「永梅吉か」

「僕です」といふ聲は五郎であつた。而して聲と共に彼はむづと李翁の手を攫んだ。

「何をする」

「此の鐵線を僕に任して下さい」

「何をする」と李翁は再び傲然と言つた。

「閣下」と五郎は怯まず言つた。「これは何ですか、貴方の手に持つて居らる、此の綱は何です」

か、爆裂弾への電線ではありませんか」

李翁は凝と五郎を見下ろした。而して靜かに言つた。

「貴方は妨害する積りですか」

「閣下、一言僕に言はして下さい。閣下の志は鬼神を泣かしむるに足りません。國の爲め四千萬の同胞のために一身を抛うたうとなさる其御心に對しては誰が何と言ひませう。併し今此で楠大將の一行を襲殺した處で其結果が什麼なりませう。日本は益々警戒を嚴にします。閣下を初めとして全國の志士が悉く捕へられます。獨立運動者は根を絶ち葉を枯らされます。而して其の以後は誰れ一人韓國のために義を唱ふるものもなくなります。日本が臺灣を統治した政策を御覽なさい」

「其れは知つてる。それは知つてる。併し國家の危機を救ふには血を以てせざれば何事も出来ないのだ。生て屈辱の國民たるより死して千載の下に懦夫を起たしむるのは私の執るべき道だ。私が死んでも私の志は後世に始る。私は此に第一の犠牲を拂ふのだ」

「其れはくゞ夫死です。閣下」と五郎は衷心から叫んだ。血を以て血を洗ふのは愚です。閣下

が眞に韓國の獨立を御考へなさるなら何故先づ韓國國民の精神的統一を計らないのですか、全國民結束して自治の力を養へば日本と雖も決して韓國を併呑しないのです。韓國自身が獨立の力がないから日本は東洋の平和のために韓國を經營しなければならなくなつたのです。今此で假に閣下が獨立し得るとするも頼る處は何ですか、日本を敵として恃むものは先づ米國です。米國人は利害に敏にして人道を第二に置く國民です。人種の差別は到底韓國と一致する事が出来ません。前門に虎を拒いで後門に狼を容るゝとは此の事です。日本は猛き虎です。米國は貪慾な狼です。猛き虎は心に邪念なきも貪慾な狼は最も恐るべきものです。若し閣下が眞に獨立を欲するならば此の恐ろしき手段を捨て、先づ國民の獨立し得る實力を養ふ事に御盡力下さい」

「其れは既に晩い」と李翁は五郎の手を挽ぎ放して「私の仕事を妨害するな」

「いや妨害します」と五郎は猶も李翁の手に縋り付いた。

「閣下、閣下がいま一人の楠大將を殺しても日本には楠大將の様な人物が幾十人もあります。畢竟策を以て水を汲むの類です。閣下、世界の上と同じく住んで居る人間が、只だ土地の

主權の上から血を流し人命を絶つまでの慘酷な行爲を以て争闘する必要が何處にありませう。國が無くとも家がなくとも人類として生存するに差向へがありません。若し韓國民が強くなれば今日と反對に日本を併呑する事も出来ません。單なる國籍の上に血を流すよりも私達はもつと大きな人類全體の幸福を考へねばなりません。日本人が厭なら歐洲へ行きませう。歐洲がいやなら亞米利加へ行きませう。何處に住んでも私達は人間として正しくあり立派であれば可いのです。閣下僕の言ふ處が誤つて居りますか。閣下七十の高齡を以てして猶ほ小さな國籍問題に人を殺し自らも死ぬのですか。逃げませう、閣下、私と一緒に逃げませう。そして私達は國土以上の高い處に立つ人になりませう。閣下決心なさい。此の罪深き綱を御捨てなさい。只今此で最も清い人になりなさい。そして私をも清い人間にして下さい。哲學者の議論は聞く耳持たん。そこ放せ」と李翁は身を慄はした。

「放せ」

「放しません」

遙かに汽車の音が聞えて來た。

九

「汽車が來た。さあ放せ」と李翁は叫んだ。

「いや、放しません」と五郎は死に物狂ひに李翁の手に縋り付いた。

「よし放さんか」

李翁は二三歩退つて衣匣から早くも短銃を向けた。「氣の毒だが射つぞ」

「射して下さい。お父さん」と五郎は父の前に跪いた。「お父さん、あ、射して下さい。僕は貴方の子です。貴方が日本に残して大島さんに託した子は僕です。此大島五郎です。貴方は貴方の國の爲に日本の總督及無數の人々を殺さうとなさる。其が眞理であるなら僕は僕の眞理を守ります。僕は日本の國土の恩を受けた人間です。御父さん、僕は貴方を父とは言ふもの、僕の心は日本にある大島の父を眞實の父と思つて居ます。貴方は韓國祖先の恩を重しとするなら僕は養育國土の恩を重しとしなければなりません。御父さん、僕と貴方は敵です。どうして恚ういふ悲しい事になつたのでせう。二人の立場が差つた場合に何れか、死ななければならぬ事にな

ります。御父さん、さあ僕を射て下さい。僕は日本の警察に迫害され僕の義父は日本の商人等に迫害され日本に對する恨は數限りもないけれども、日本の國土は守らねばなりません。日本の人類は救はねばなりません。朝鮮人の子であると知りつゝも大島の父や楠大將は最愛の娘を僕の妻としやうとしてくれたのです。其の人達を貴方は今殺さうとなさる、其れは恩義に背くものです。人道に背くものです。國の怨みを晴らすためには人道に背いても宜しいと仰有るなら先づ僕が殺されませう。貴方が二十五年前に國家のために捨てた此の五郎を二十五年後の今日矢張り國家のために殺しなされるか殺されませう。僕は喜んで殺されませう。恩義ある日本國のために、而して又た生みの父の祖國のために……さあ御父さん貴方は貴方の主義に依つて僕を殺して下さい」

「お前が」と李翁は思はず短銃を落した「おうお前が」

「御父さん」と五郎は父の胸に頭を埋めて泣き出した。「正しい人になつて下さい。人類の保護者になつて下さい。私も日本を逐はれました。貴方も國のない人です。御父さん、さあ行きませう。自由の人になりませう」

「私は……私は……私は」と李翁はばかりと高粱の上に倒れた。

「御父さん」

「うむ、私の……私の伴……」

「僕の御願を聽て下さいましたか」

李翁は答へなかつた。而して霎時泣いた。堪へ様々とした歎歎が次第に聲に出た。

「伴々々、私は什麼すれば可い」

父の身に取ては何處に辛からうと五郎は思つた。今日此の舉を忘れれば多年の宿望、同志の計畫が悉く空になり、變心賣國の汚名が一時に身の上に落ち來るであらう。

「御察し申します」

父は沈黙した。汽車の音が次第に近づいた。父は突然起上つた。

「伴、許してくれ」

彼はよろくと走り出した。

「御父さん」と五郎は駆け出した。此の時汽車が眞直に駛つて來た。汽車が過ぎるまで父

は立ち止まつて凝と見詰めて居た。其の齒の根がたたくと憤怒に慄えて居た。髪がもやくと動いた。

女！
女！

大同江に夕榮する雲の色に秋立てば韓人の叩く砧の聲悲しく響いて街の柳に哀れが深い。晶子は今ま湯上りの暖かい肌を夕風に吹かれながら鏡臺を端近に出して洗髪を梳き上げ漸と薄化粧をして吻と息を吐きながら霎時夕雲の動くのを眺めて居た。此の春京城を出てから此に半年夏も過ぎて九月の初めになれば日中は残暑に汗も催すが朝夕は打て變つて袷に羽織が欲しい。京城から平壤に出て新義州まで普く探したが一向五郎の行方が知れない。再び平壤に戻つて小さな宿屋に假住居して居るもの、懐には僅かに此の月分の費用を残すのみである。一人とは差つて四人の宿料は坐して食へば山も空しである。其れを三人に言ひたくない。言はずに居ると父侯爵の膝元を無断で飛出した身は今更ら侯爵に訴ふべくもない。見すく困る四人の身

の上に搗て、加へて五郎の手掛が毫もない。此の難關を什麼して切抜けやう。

「榮然と考へて居ると隣室に菊子の聲が聞へる。」

「もつと面白い記事が無いの？血の燃へる様な戀物語か何か？」

「そんなものはありません」と六藏の聲、

「朝鮮の新聞なんて詰らないわね、朝鮮人は戀をしないのか知ら」

「そんな事は僕に解りません。あ、藝者の駈落があります」

「汚いわ、藝者なんて、あんなものに本當の戀があるもんですか……何かもつと面白い記事が

なくて？」

「あ、大事件！」

「なあに？」

「死骸の主が解つた。は、あ此の夏の爆弾で死んだのは暴動團の頭目李成民だといふ事が解つたのです。何しろ骨も皮も滅茶くになつて解らなかつたさうで」

「いやね、そんな厭な記事は言まなくても可いわ」

「待つて下さい。それが什麼して李成民だと解つたかといふに箕子廟の背後に自然石を轉がして置いた石碑が新に出来たので其れは暴徒の連中が密かに遺骨を拾つて埋めたのださうで」

「もう止して頂戴よ。私はそんな暗い話は聞きたくない。私はもつと明るい世界を見詰めたいんですわ」

「貴方は氣樂ですな」

「私が氣樂ですつて？私達の心持は貴方方にや解らない。貴方は戀をしたくない事？」

「そんな事は僕なんか」

「だから駄目だと言ふのよ。あ、私戀をしたい。眼が眯む様な、胸が張り裂ける様な戀をした

い」

「貴方は戀をしてるんぢやないですか」

「戀をしても當がないんですもの、詰らないわ」

二人の對話が途絶れた。と聽て菊子の溜息が聞へる。

「あ、秋になつたわねえ」

晶子は慄然とした、いかにも秋になつた。うつら／＼と定めなき月日を送つてる中に夏が去り秋が来て又來年になる。若い時に青春の樂みがなくて眼に見ゆるものは是れから段々老いてゆく我が姿である。此の淋しさは男に解るまい。慙う思ふと自分もつく／＼泣きたくなる。「石尾さん」と再び菊子の聲が聞へた。

「何ですか」

「貴方は私に戀をしない事？」

「いやです」と六藏は眞面目に答へて

「貴方は何だつて其那事を言ふんですか」

「あら退屈過ぎよ。私が戀人を發見するまで貴方を戀人にして置くのよ」

「實に失敬ですな」と六藏はふり／＼した。

「貴方も戀人が發見するまで私を戀人にして置くと可いぢやないの？」

六藏は起て縁に出たらしい。而して何やら唸り出した。

「拔山倒海の勇あるも、榮華は夢か幻か……」

「どうも不思議だ」と晶子は思つた。眞面目か不眞面目か菊子の性格は晶子に解らない。女は身體の工合で月に一二度は急に嬉しくなつたり悲しくなつたりするものだ。自分にも多少爾いふ事があるが、菊子さんは其の度が強いのかも知れぬ。兎もあれ私の爲にいつまでも慙那に空な月日を過ごさせるのも氣の毒な事だ。寧ろ高井さんに話して三人に歸國して貰ひ、私一人で五郎さんを探さうかしら、其れにしても高井さんは今朝出たきり未だ御歸りが無いのは什麼したものだらう。

慙う考へて居ると菊子は襖を開けて顔を出した。

「あら、洗髪？氣持が快ささうね」と菊子は嬌然して「貴方の長い柄の付いた御扇子を拜借ね」

「どつかへ被行やるの？」

「えい、ちよいと男を見に行くのよ。あの扇子を以て歩くと人が皆な振返るから」

「悪戯は御止しなさいよ」

「あら可いのよ」

塗骨の長い柄の付いた扇子を持つて菊子は嬉しさうに出て行たかと思ふと直に歸つて来た。「矢張駄目だわ。朝鮮くんだりまで來てる日本人は大抵内地の食詰者か、但しは金儲ばかりで眼の色が濁つてる商人ばかりですもの。あ、私本郷の三丁目に立てる様な氣分になりたい。何方を見ても學生でせう。制帽制服かでなければ紺飛白にぼろ袴でインキ帯を前にぶら下けて、何といふ活々した青春の氣分でせう。あの人達の胸には若い若い而して沸湯の様な紅い血が響を打つて居まさあね。私が今宿屋の前へ出ると變な奴ばかりじろく、私を見るんですもの、其の中の一人がね……」

言ひ續けやうとする途端に女中が入つて來た。

「御嬢様へ御手紙が」

「私？」と晶子は手紙を受取つて「あら高井さんからよ」

「兄さんから？」

「えい」と封を切つて讀み下ろす。

「五郎君の居所が解つた。貴女一人だけで此の車で直來て下さい」

「あら」と晶子は飛立つ様に大きな聲を出して直心付き菊子の方を見やつた。

「あら解つて？」

「行つて來ますわ」と晶子は髪に手をやつて「あら什麼しませう」

「洗髪だつて可いぢやないの？少し鼻先だけ御叩きなさいよ」

晶子は白粉を鼻叩きでなすり付け「これで可い？」と子供の様顔を出す。

「眼の縁に付き過ると腫ぼつたく見えるわよ。それから唇に白粉が付いてるわよ」

晶子が顔を直して居る間に菊子は茄子紺の袴を出してくれた。而して其れを着せてやるやら帯を締めてやるやら、霎時菊子は夢中になつて漸く晶子を送り出した。

「五郎さんによろしくね、私待つてるから直連れて被來やい、若し此方へ來られない様だつたら私を迎へによこしてね」

「え、爾しますわ」

晶子は最早胸が轟き耳が熱して恰ら夢に夢見る心地で車に乗つた。

車が走り出した、菊子は二階から其れを見送つた。車が段々遠くなつて往來の人中に見えずなつた時、彼女は不圖吾に復つた。

「晶子さんは什麼に嬉しからうだが私はもう終局が近づいた」

此時に菊子の胸に今まで知らなかつた嫉妬の情が湧いて來た。

「私は今まで何を待つて居たのだらう、馬鹿くしい」

三

晶子一生に一度の喜びを載せた車は矢の如くと言ひたいが實は韓人の車夫は牛の如く鈍い鈍い車の上で晶子は早五郎の男らしい姿を想ひ浮べ一別以來の挨拶や話の順序まで練習し終つた御病氣なのではあるまいか但しは何か御身の上に凶事でも起つたのではあるまいか。

嬉しいにつけて又不安の念も湧いて來る。車はとある洋館の門を入つた。其處は平壤ホテルであつた。晶子が車を降りるとボーイが直二階の一室に案内した。室の入口には八號と書いた札が掲げられてあつた。扉を押すと直オリブ色の窓帷と塗骨の洋室屏風が眼に付いた。窓帷

は深い襷を造つて暗い藍色に見えたり又た柔かな青黛の色にも見えた。而して凡ての窓が塞がれてあるために室内は和らかに薄暗かつた。卓子の上の銀の貰入や電話機などが底に光を帯びて冷たく輝く、虎の皮を敷いた大きな寢椅子が横に置かれて、廻轉椅子の緋の天鵝絨色が暗く見えた。晶子は室に人の氣勢がないのを知つた。而してボーイの薦むる儘に椅子に腰を下してもう一度室内を見廻し、

「御容様は？」と訊ねた。

「只今直きに」とボーイは答へた。而して扉の外に姿が隠れた扉は靜かに閉まつた。ボーイの足音が廊下の敷物の中に消へた晶子は三角棚の上に種々な旅道具が載せられてあるのを見た。「あの鞆が五郎さんのだらう。あの帽子も、あの外套も、而してあの皺だらけにしてある手拭も爾だらう。其れにしても随分立派なものばかりだ。此の様子では餘り困つて被居やりさうにもない。まあ是で好かつた」

彼女は立て棚に近づいた、圓い小さな大理石縁の鏡が室内を映してある。其處に一枚の象牙の櫛が載せてあつた。彼女は其れを取上げた。而して櫛の香を嗅いだ。高價な香油の香が咬か

す様に漂ふた。

「こんな香であつたか知ら」

晶子は五郎の香を能く知つて居た。男は男臭いものだと言ふと女の方がいやな香がすると二人で言ひ争つた事がある。其の香と此の櫛の香何の點が差つて居るかは知らないが、兎に角、男といふもの、香であると思つた。彼女は其れから鞆を撫で、見たり手拭を疊んで見たりした五郎のものなら自分が手を付けても差向へがないと思つたのである。そんな事をしてる間に五郎の姿が見えない、高井の聲も聞へない。

「食堂へ行てるのかしら」

もう一度ボーイに訊て見やうと彼女は襟を搔き合せ、更らに圓い鏡に向つて髪に手をやつたと見ると薄暗い青い室の奥に一人の男が立てるのが映る。

「おや」と思ふ間もなく男がちかくと近づいて來た。

「晶子さん」

軽く肩に手を掛けたのは高井でもなく五郎でもなく奥田富男であつた。

「あら奥田さん」

「能く被來て下さいました。さあ御掛けなさい」

「あら大變失禮を致しました、ボーイの粗忽で室を間違へまして、御免下さい」

晶子は會釋して去らうとするを富男は呼び留めた。

「少々御待ち下さい」

「何か御用でございますか、急ぎますから何れ又」

晶子は急ぎ足に扉に手を掛けた。押せども廻せども扉は磐石の如く動かない。

四

「扉が開きませんか」と富男は冷やかに遠くから聲を掛けた。

「はい」

「開けてあげませう」

近寄た富男は把手を握つた晶子の手を確と握つた。

「霎時私に時間を御與へ下さらんか」

晶子は驚いて立退りながら「何をなさるんです」

富男は答へず胸椅子に立戻つて「晶子さん、貴方はどうして此處へ被來つたのです」

「五郎さんに御眼に掛るつもりで」

「五郎？五郎さんとは？」と合點ゆかぬ様に眉を擧めて富男は燐寸を擦て葉莖に點け「あ、傷でしたね、私が手紙にそんな事を書きましたね」

「何と仰有やるんです」

「晶子さん、高井の名前で貴方を呼び寄せたのは私です。五郎君でも高井君でもないのです」

「えつ？」と晶子は吃驚して富男の顔を見詰め「貴方は偽手紙を……」

「爾ですよ、偽名をしなければ貴方が來て下さらないもんですから」

「貴方は私を欺いたのですね」

「左様、併し私は貴方の御父様から貴方を委託されてありますから」

「其れは私の知つた事ではありません」

「貴方が御存知なくとも私が知つて居ます。兎に角晶子さん、私が御父様の御命令に依つて貴方を御召びしました。就ては貴方が私の御話しする事を御聞き下さる義務があると信じます」

「では簡単に承はりませう」と晶子は椅子に腰を下した。今まで熱した血は俄に冷渡つて、嬉しさが烈しかっただけ絶望と憤怒が胸いつばいに溢れる。

「では御話し、ませう。だが晶子さん、私が詐つて貴方をお召びした事に就て悪い感情を持つて御出でになると困ります。お互に知らぬ仲ではなし、親と親との許嫁てな間柄なんですからね。もつと打解けて下さらんとお話が仕憎いですよ。ねえ晶子さん、私がいかに貴方を愛して居るかは貴方が能く御承知の事だと思ひます」

「どうか御用向を伺ひませう」

「左様、其の御用向は即ちですな、即ち私が貴方を愛して居りますことは既に天下の認むる處であつて見れば即ちですな」

「失禮いたします」と晶子は立上つた。

「待つて下さい」と富男は慌て、「晶子さん貴方は未だ私の心が御解りになりませんか」

「貴方は私を愚弄なさるんでせう」と晶子は屹と言つた。

「いや決して其れは」

と富男はぢり／＼と傍に寄り飛鳥の如く手を伸ばして晶子の肩を引き寄せ様とした。途端に晶子は一步退つて窘なめる様に叫んだ。

「失禮な事をなさるな」

富男は立竦んだまゝ、晶子を見詰めた。晶子は富男を見詰めた。互ひに無言の中に肩ばかりが動揺した。

「何と言ふ卑しい眼なんだらう」と晶子は思つた。頭は綺麗に梳いて油の色が艶やかに、額も鼻先も滑らかに光つて居る。而して伶俐さうな眉の下に鈍色の獸的な眼がどんよりと輝き、鼻の下の長さを隠すためにちよんびりと短い髭を蓄へ、弛んで力なき唇、馬鹿々々しく長い腮、それ等を綜合するとぼんち晝にある富豪の若旦那の資格を悉く具備して居る。

「こんな厭を男は二人とあるまい」と晶子は思つた。

五

富男の顔を見れば見る程晶子は堪まらなく厭になつた。

「扉をお開け下さい」と彼女は命令する様に言つた。

「どうしても私の願を聞いて下さらないんですか」と富男は哀を乞ふ様に言つた。

「扉をお開け下さい」と晶子は再び言つた。

「よろしい開けませう」と富男は鍵を鍵穴に挿込んで振り返り「併し晶子さん、貴方は今私の願を拒絶なすつて後悔なさる事はありませんか」

「そんな事は御心配に及びません」と晶子は冷やかに言つた。

「だが晶子さん、私は今此に祕密の一大事を貴方に御知らせしたいと思ひます。其れは五郎君の身の上に就いて頗る重大な事です」

「五郎さんの？」と晶子は思はず顔を向けた。

「爾うです。五郎君が今何處に居ると思ひなさる」

「そんな事は什麼でも宜うござんすわ。私は貴方に承はらなくても、他に知るべき道がありませんから」

「其れでは仕方がない、私も言ふ事を止しませう。併し氣の毒なのは五郎君だ。五郎君は不逞鮮人の群に入つて此の夏爆裂弾を總督の汽車に投じました」

「何で其那事を言ひなされるのです」と晶子は窘める様に言つた。

「貴方は五郎さんの中傷する事を以て貴方の職業と思つて被居やるのね紳士はそんな事をなさるものでありませんわ」

「若し其れが私の職業なら私は大成功したものですよ。如何となれば私は確實な證據を握つて居るからです」

「貴方の證據なら嘸立派な證據でございませう」と晶子は冷やかに笑つた。

「これを御覽なさい」と富男は衣匣から革製の紙入を出し、其の中から泥に汚れた一封の手紙を取り出した。

「これは何といふ字ですか」

「大島隆二殿——私の父に當た手紙でせう」

「裏は？」

「李成民！」

「李成民といふのは不逞團の巨魁である事は貴方も新聞で御存知でせう。而も爆裂弾の場所で死んで居た……」

「其れが什麼したのです」

「此に依つて見ると李成民と貴方の義父さんとは親密な間柄である事が解ります」

「爾かも知れませんが、其れだけでは何でもありませんわ」

「爾です、これだけでは何でもありません。だが此の手紙を托された人は誰だと思ひますか」

「解りません」

「此の書を我が信する日本人秋山武男君に托すと書いてありますよ。秋山武男といふのは五郎の名です」

を托されただけでは何てもありませんわ。郵便屋さんだつて手紙を配達します」

角です。併し此の手紙は何處にあつたかを御話しましたら恐らくは貴方も一言の辯護
 出来ないでせう。此れは爆裂の場所にあつたのです。而も五郎君の上衣の衣匣に入つてあつ
 たのです。これと共にあつたのは七圓餘り入つた囊口と、知人の住所や偶感の様なものを書い
 た手帳と、而して手帳の裏の方には大島五郎と明らかに記してありました。して見ると五郎
 君は李成民と共に爆裂弾を投じて逃ける積であつたのが不幸にして意を果さず、自分も負傷し
 たので李成民を捨て、遠くへ逃げたものと思はれます」
 「五郎さんは負傷を？」と晶子は思はず顔色を變へた。

六

聞く事毎に驚いた晶子は五郎の負傷を聞いて更に驚きを増した晶子が驚くを見て富男は急に強
 くなつた。
 「爾です、負傷は疑ふ餘地がありません。如何となれば脱ぎ捨てた上衣の片腕は血だらけにな
 つて居たからです。只だ負傷の箇所は腕だけであつたか、但しは胸や腹や頭にも傷を負ふたか

は解りませんが、高梁の葉を血汐で染めて逃げた事だけは事實です。私はその時一と汽車後れ
 て参りました。途中で汽車が爆弾のために不通になつたので仕方なしに歩き出しました。する
 と兇場の附近に朝鮮の貧民どもが手ん手にかんてらを提けてうろくして居たのです、其れは
 其の以前の爆発の時汽車が轉覆したので、貧民どもはどさくさ紛れに貨物や乗客の持物を盗ん
 で随分と儲けた事があるので、今度も其れかと思つてやつて來たのです。其の中の一人は曾て
 私の農園に使用したヨボでした彼は私に顔を見られて頗る體裁悪さうにして「旦那様私は何も
 盗りません。此の上衣を拾つて警察へ届けるつもりだつたのです」と言譯がましく言ひました
 として上衣を振つて見せた時、足元に落たのは此の手紙でしたそこで私は其れを買取つたので
 す。一々調べて見ると驚く事ばかりぢやありませんか。五郎君が李成民の部下となつて居たの
 が明らかであるのみならず、最も驚くべき事は五郎君は李成民の實子である事です」
 「何を仰有るんです」と晶子は顔を擧げた。
 「此の手紙に依ると其れが明かです」
 富男は得意になつて讀み下した。晶子は一句くんに注意して聽いた。いかにも義父の大島隆

「何ですの？」
「貴方の身體です」

七

晶子は吃驚して富男の顔を見詰めた、と何とも言へぬ憤怒と輕蔑の念がむらくと起つて顔は火の如く熱した。

「貴方は私の身體を什麼なさらうと仰有るんですか」
彼女は屹と言た。

「私の妻になつて貰ひたいのです」

「貴方の奥さんに？」

「爾です」

「私には五郎といふ許婚がある事を御承知の上で？」
「無論承知して居ます」

「私が貴方を少しも愛して居りませんでも」

「愛といふものは自然に湧いて來ます、例へば接木の様なもので、二つの異なつた植物が接木をすれば終生離るべからざる一つの木となります。肉體から精神に入るものと精神から肉體に入るものと形式が異つても結局同じ結果になるのです」

「私が厭だと言ひましたら？」

「私は五郎君を叛賊として告訴するだけの事です」

「なぜです」

「五郎君の存在は私の戀のために妨害になりますからな、目前の雲は拂はざるべからず眼の上の瘤は截らざるべからずですかね」

「御自分の慾望のために人を害し私を苦めやうとなさるのですね」

「無論です」

「貴方は實に悪い人ですね」

「貴方に戀しなければ悪人にはならないのです、して見ると私を悪人にしたのは貴方です」

「御随意になさい」と晶子は血を吐く様な聲で言った。「貴方の御望み通りになりませう」

「なに？」と富男は吃驚して「ななんですか」

「五郎さんのために私の身體が御入用なら私を什麼ともして下さいまし」

「そ、それや本當か」と富男は嬉しさに弗と顔を染めて獸的な眼につやくとした光を浮べ「本當ですか」と繰返す。

「私は嘘を吐きは致しません、奥田さん、貴方も紳士で被居やるなら約束だけは履行下さるでせうね」

「無論、どんな事があつて……」

「五郎さんの祕密を決して外へは御漏らしになる事はありますまいね」

「では其の上衣と手紙と手帳を私に下さいますか」

手を伸ばして取らうとする晶子を拂ひ退けて富男は慌て、言った。「其れは不可ません、未だ少し早い」

「なぜですか」

「結婚の當日に此の三品を渡す事にしませう然らずんば……私の唯一の綱は此の三品だけなんですからね」

「品物と私の身體の交換ですか」と晶子は冷やかに笑つた。彼女の眼には富男を蔑すむ色がいて居た。

「約束は約束ですからな」と富男は綺麗に剃つた顎を撫で、「兎も角、話が爾と決まれば結ばは何日にしませうか」

「何日でもよろしうございます」と晶子は明瞭と言つた。

「明日でも？」

「はい」

「だが明日と言つても餘り急だから兎も角侯爵の御都合を訊いてからにしませう。」

「其れは不可せん」と晶子は遮つて「貴方と私の結婚には一切他の人に關係して戴きたくありません、二人きりの御約束ですから」

此の小説を讀んで奥田富男の卑劣を嗤ふ事を御止めなさい讀者よ。

世の中には黄金、力や父祖の威光や卑しき誘惑を以て一點の愛もなく尊敬もなき女を妻としてるものが幾千萬となくある。諸君の隣近所見渡す限りに於て散在して居る。富男の望む處は一塊の肉である。牛肉屋の店頭に吊されてある牛や豚の片脚と同じなものである具れが今日多くの日本人が妻にする態度である。

晶子は憤怒から冷めて只だ一個の木偶人に對する様な氣がした。彼の胸は如何にして五郎を救はんかに集注して居る。其の他は何んにも考ふる暇がなかつた。彼女は我が節操の蹂躪される事も、二度と五郎に顔を向ける事が出来ぬ事も、將來幾十年間涙の中に暮さねばならぬ悲しさも思はなかつた。而して自分の肉體が怎かる時に五郎の役に立つ事が出来るのを喜んだ。「可し／＼」と富男は天にも昇る心地で言つた。

「なるほど二人の秘結は二人で處決するが可いですな。すると兎も角貴方と私とは假結婚をす

るですな、追つて披露に及ぶとしようかな」

「御自由になすつて下さい」

「爾だ、爾なると結婚は明日でも可い譯ですな。明日でも、實に私は何といふ幸福者だらう。明日！明日！明日は私の一生涯の中で最も記念すべき日ですな」

彼は慙う獨りで饒舌り續けたが急に口を噤んで疑ひ深さうに晶子を見やり、

「だが明日結婚をする、そこで上衣や手紙を貴女に渡す。それを持つて貴女は逃亡する……これは不可ぞ、不可／＼／＼貴女は其の計畫でせう？」

「私がどんな計畫をしようかと貴女に御話しなければならぬ義務がないと思ひますわ。豈夫私に貴女を欺きは致しますまい。其れを疑ふ位なら此の御約束を中止なすつたら可いでせう」

「いや／＼／＼中止なんて飛んでもない」と富男は慌て、言つたが再び小首を傾けて「はてな明日結婚する。だが貴女は私を愛して居ない。私の妻になつて居る事が苦痛だ。そこで私といふものが邪魔になる。そこで私が快く眠つてる寢息を狙つて首を掻くか、酒の中に亞砒酸を入れるか。……こりや不可、不可、々々々實に不可ぞ、晶子さん」

晶子は呆れて答へなかつた。

「いや待て」と富男は又もや首を捻つて、今度は肚の中で「まさか其那事はあるまい。爾だ、兎に角私の妻だ。妻となる以上は妻としての義務が生ずる、良人の首を掻いたり逃亡したりするのは妻としての行爲でない。そこで私は安心だ。其の中には晶子さんは屹度私を愛する様になる。私は容貌に於ても普通以上だ。電車に乗つた時いつでも四邊の男を見廻して見るが私に優る者は一人もない。それに私は親切のありだけを盡してやる藝者なぞまで私の口説には降参つてしまふのだから素人を嬉しがらせるのは御茶の粉だ。いよいよ私に惚れ込んだ處で結婚すると、上衣も手帳も焼かれずと濟むのだ。あの證據物さへ持つて居れば永久に晶さんと五郎の頭を抑へて置く事が出来る。

恚う思案を決めて彼は優しさうな聲で晶子に言つた。

「凡て承知しました。だから晶さん、結婚は兎も角として、先づ明日から貴方と私と同居する事にしませう。無論五郎君の秘密を許くと私は貴方と結婚する事が出来なくなり又貴方が逃亡すると私は五郎君を告訴する事になりますから、お互に此の秘密を守りつ、仲好くする事にし

ませう。どうですか」

「承知しました」と晶子は靜かに答へた。

九

灯ともし頃に高井實は平壤の街を歩いて歸つた。今日も五郎の行方に就て何の手掛もない。街は秋風吹いて肌寒き雲が次第に紅から褪めて闇い地平線へと收まり行く、街の中は勞働者や會社員らしい人や支那人や韓人が日の短かいのを啣ち顔に空腹さうに黙つてぞろ／＼行く、實は東京の街を憶ひ出した。本郷や神田や銀座の輝やかしい賑やかさの中に五郎と二人で書店を流り歩いた事も思ひ出した。僅かに一年の間に二人の境遇ががらりと變つた。而して其人は今ま謀反人として政府に目指されて居る。何處を什麼して隠れ歩いて居るだらう。僕等が恚う彼を思つて居る如く、彼も亦た僕等を思つて居るだらう。今ま沈みかけて居るあの薄紅い雲を眺めて淋しく歎息して居るだらう。

實の眼は涙で充満になつた。彼は五郎が恚那になつたのも畢竟自分が晶子に戀をしたためで

あると思ひ定めてゐる。あの事がなければ五郎が飛出しやしなかつたのだ。飛出さなければ暴徒の群に入る事もないのだ。

考へれば考へる程自分の責任を幹々と感ずる。

「どうしても捜し當て、五郎君の宛を雪ぎ、青天白日の身にしてやつて、晶さんと結婚させなければならん」

一日の疲れにくつたりとして彼は漸く宿に歸つた。歸ると菊子がヴァイオリンを弦いて居た。

「あら兄さん」と菊子は驚いて、

「晶子さんは？」

「居ないのか」

「あら、先刻兄さんから手紙の使が来て、五郎さんの居所が知れたから直ぐ来いと言ふんでしたから晶子さんが大急ぎで行きましたわ」

「知らんよ僕は」

「あら」

「其りや不思議だ」と六藏も言つた。

「はてな、どうしたんだらう」

三人の頭に不安の念が動き出した。察する處何者か、晶さんを誘拐する手段だらう。今頃晶さんは其奴の術中に陥つてるかも知らん。慥う思ふと實は悚然とした。

「僕は行つて来る」と六藏は起き上つた。

「何處へ行く」

「さあ其れは解らない」

此の上は警察に頼むより他に方法がなからう三人は額を鳩めて協議して居る處へ、ふらりと晶子が歸つて来た。

「あら」と菊子は突然晶子に抱付いて「まあ可



かつた。本當に可かつた」

「随分心配しましたよ」と實も六藏も言つた。人々の好意を感謝しながら晶子は微笑して居た。

「一體其れは何人ですか」

「其れはね」と晶子は言ひ淀んだが直ぐ決然と「奥田さんでしたのよ」

「奥田？あ、彼奴か」と六藏は忌々しげにして、五郎さんの居所は？」

「わかりませんのよ」

「不埒な奴だな、奥田の畜生いつか彼奴を撲つてやつたが、あの時叩き殺してしまへばよかつた」と六藏は一人ぶりくして言つた。

「では何の必要があつて偽手紙を書いて貴方を召だのでせう」

「其の事ですがね」と晶子は改まつて「皆さん、いろ／＼御世話をいただきましたが私明日から皆さんと御別れしなければならなくなりましたわ」

「どうして？」菊子は言つた。

「私ね、結婚をする事になりましたのよ」

「あら！」

「結婚を？」

「誰と？」

三人の聲が同時に出了た。

一〇

三人の顔は齊しく晶子を見詰めた。晶子は平然として言つた。

「私、奥田さんと結婚する事になりましたのよ」

「奥田と？」

三人は益々驚いた。

「どうして？」

「私に理由を訊いて下さると困りますわ。私ね、只だ結婚がしたくなつたのよ、本當ですか」と六藏は膝を進めた。

「えい」
「本當に本當ですか」

「えい」

「貴方は奥田に欺されてるんです」

「い、え其那事はありませんわ。私ね、いつまで怒うして居ても皆さんに御迷惑を掛ける許りですから」

「迷惑とは何です」と六藏は満面に憤怒の色を濼へて言った。

「僕等は僕等の盡すべき道を取つて居るだけです。貴方に頼まれてやつて居るわけではないのです。つまり五郎さんを中心にした吾々の團體が五郎さんを救はうといふ考へが一致したのです。貴方も團體の一人で、吾々と共に何處までも此目的に向つて進まうと誓ひなすつた貴方が、今變心してしまふと貴方は實に信するに足らない人になつてしまひます」

「其れは全く濟ないと思ひますわ。今までの御親切は私一生忘れませんわ」

「忘れやうと忘れまいと貴方の勝手です。お嬢様、僕は貴方が憎くなりました。本當に憎い、

男だつたら絞め殺しても足りないのです。怒う言ふと貴方は怒るかも知れませんが、怒つても可いです。僕の父は貴方の御父様の御陰で世の中へ出られた人間で、父は朝にも晩にも大鳥さんの恩を忘れるなど私に言つて聞かしてくれませぬ。だから僕は御主人のためなら火の中でも水の中でも何時なん時生命を捨て、も構はないと小兒の時から決心して居るんです。貴方と五郎さんと御夫婦になるといふ事は大鳥さんがお決めになつた事です。候爵が何と言はうとも候爵は貴方を捨てた不人情者です。そんな者の言ふ事なんか肯く必要がありません。貴方は御父様の思召に背き又た吾々の契約に背くといふ場合に僕は黙つて居られませぬ。僕は反對します。飽までも反對します。貴方の御父様に代つて僕の父に代つて吾々同士を代表して僕は腕力を以て貴方を抑留します」

「まあ、待つて頂戴よ」と晶子は蒼白になつて六藏の言葉の切目を待つて遮つた。「貴方の心持は能く解つて居ます。併し私はもう決めてしまつた事だからこれだけは見逃して頂戴ね」その中に私は屹度貴方がたに得心のゆく様にする積ですからね」

「見逃せなんて、これが見逃せるものですか、僕は厭です。厭だ、厭です」と六藏は吼

える様に言つた。

「併しね晶子さん」と實は漸と口を開いた。

「僕はどうしても是れが本當とは思へません。晶子さん、貴女は何か他に事情があるんでないのですか。何か恚う言ふに言はれぬ辛い理由の下に自分を犠牲にしなければならぬといふ様な事情が」

晶子は黙つて俯向いた。

「若し爾いふ事情のためなら、どうか僕等に打明けて相談なすつて下さい。貴方は第一に義といふ事を考へなければならぬのです。人間の中に一番高いのは義です。忠孝仁義と分けてはあが、凡ての道徳は義の一字に含まれて居ます。今貴女が最も固く守らなければならぬのも義の一字です。五郎君を捨てるのは五郎君を殺す事です。若し貴方が五郎君を愛して居らるるなら、どんな辛い事があつても他人と結婚しては不可せん。ねえ晶子さん、僕は今日初めて貴方の前で言ひますが、僕と五郎君とは戀敵です。五郎君がなければ僕の戀が成立するのも知りません。又菊子と貴方とも戀敵です。貴方があると菊子は失戀に終ります。僕等兄弟が其

れにも拘はらず恚うして五郎君を捜し廻つて居ます。五郎君の姿が見えて貴方と目出度く結婚する時は即ち吾々兄妹が二人とも運命に泣く時なのです。其れを僕等が好んで自分等の破滅を急いで居ます。一日も早く五郎君を捜し當て、貴方方を幸福にしたいと望んで居ます。其れは何のためでせうか、義のためです。友人に對する義のためです。義の前には凡てのものが光を失ひます。晶子さん、貴方は訊いてくれるなど仰有るが、僕は什麼しても訊かずに居られません。貴方が奥田と結婚なさる理由を明白にして下さい」

一一

理由を明白にしろと言はれて晶子は呼吸が塞がる思ひをした其れが明白に言へる位なら萬斛の涙を包んで芝居じみた行動を取るのではなかつた。五郎が明かに暴徒の群に投じ而も五郎の實父は暴徒の首領であるといふ事が解つたら人々の驚きは什麼であらう。兇行の場所に上衣が落ちて居た。李成民が父に宛た手紙もあつた。何と言つても五郎は暴徒の一味である。然ら考ふるに五郎は感情的で急激で反抗的で一度物に熱狂すると誰が何と言つても心を離さない。

日本の警察が餘りに壓迫すると第一に起るのは反抗心で第二には日本の政府を呪ひ日本の國を呪ひたくなる。そこへ李成民は我が父であるを知つたら、直に父の麾下に屬し、自分の故國のため生みの父のために急激な徒黨を組むのは五郎として無理からぬ事である。其れを高井兄妹及び六藏に知らしたら愛國心の強い人々は五郎を何と思ふであらう。何と思つても構はないとしても、友情に篤い三人は水火を踏んでも五郎を探さうとするだらう。其のために三人は見す見す危険な地に踏込まねばならなくなる。今まで恁那に苦勞を掛けた上に是れより以上に危険を冒させる事は義に於て忍びざる處だ。のみならず性急な六藏の如きは此の事を聞いたら直奥田の宿へ闖入して奥田を殺すかも知れぬ。騒ぎが大きくなれば五郎の危険が益々深くなる。三人の身を安全にするため又五郎を救ひ出すには晶子自らが犠牲になるのが最も策の得たるものである。お母もまろまろと涙の互ち、聖母の如き、何れもはまらるる。

理由を言はずに奥田と結婚するなどは、實際三人を侮辱し今までの友誼を蔑んだ行爲だ。だが其れを言ふたら凡てが破滅である。是れから三人分の苦勞を一身に引受けるのだから今日の無禮は恕して貰ひたい。

晶子は心に決めた事を又繰返した。

「どうです晶さん、御互に兄妹も管ならぬ間柄ぢやありませんか。秘密があるなら打明けて下さい。及ばすながら什麼な御相談にも乗りませう。六藏君も居ます、妹も居ます、僕等は義のためなら何時でも死にます」

晶子は黙つた。義のためなら何時でも死んでくれる人達であればこそ此の秘密が打明けられないのである。

「どうです」

「恕して下さい皆さん」と晶子は聲に兩手を突き「私は只だ結婚したくなつたのです」

「結婚したければ五郎さんを早く探すが可いちやありませんか。若し五郎さんがどうしても厭だといふなら高井さんと結婚なさるが可い」と六藏はがみく、吐き出す様に言つた。

「僕は實に困つた」と實は霎時黙つた。其れは奥田との結婚を否認すべく何となく氣が咎めたのであつた。併し彼は聽て言ひ出した。

「貴方の幸福になる事なら僕は決して反對はしません。だが奥田の下劣な人格は貴方も御存じ

の筈です。僕は貴方に未練があつて反對するのではないといふ事を御認めを願ひます」
 「どうしても奥田へ行くのかなあ」と六藏は歎息した。女といふものは馬鹿なものだ。あ、僕ももう生きてるのが厭になつた。日本へ歸つても社長さんに會はせる顔がない。鈍直は目撃し、
 「勘忍して頂戴よ」と晶子は消え入りたさうに言つた。實は堅く唇を嚙みしめて居たが突然叫び出した。

「僕は厭だ。晶子さん僕は五郎君に代つて貴方の結婚を断りに行きます」

起ち上る兄を惹き留めて菊子は初めて口を開いた。

「私に考へがあります。兄さん待つて頂戴」

「私は賛成しますわ。晶子さんが奥田さんの處へ被行やるが可いと思ひます」

一一一

實も六藏も猛烈に反對するのに菊子一人が賛成だと言ひ切つたので三人は吃驚した。

「なぜ／＼賛成か」と實は苛々して言つた。平素温厚で沈黙な實が慥くまで昂奮したのを

見たのは初めてである。菊子は兄と晶子の顔を等分に見やつて言ひ續けた。

「皆んなが自由にならうぢやないの？」

「自由で何だ」

「友情だの義理だの道德だので束縛するから恚那事になるのよ貴方は晶子さんを束縛する権利がありませんわ」

「束縛はせん、只だ僕の意見を述べただけだ」

「其れが不可いわ。晶子さんが相談をなすつたら意見を述べるが可いけれども、最初から私は奥田と結婚しますと報告なすつただけですもの」

「併し誤つた道を歩む場合に注意するのは友人の義務だ」

「それは女だと思つて侮つてるのよ。自分の方が賢いと思ふからだわ。晶子さんから見ると貴方方よりも御自分の方が賢いと思つて被居るかも知れないわ。子供でない以上は意志を尊重しなきやならないわね」

「お前の言ふ處は全て友人に對する愛情のない話だ」

「まあ御聞き下さい」と菊子は其の熱情的な眼に光を添へて「兄さん、私達の踏んで居た道は間違つて居ました。私今初めて其に気が付きました。人間にはどうしても強ふる事の出来ないものがあります。例令ば孝行は大切な道徳ですが、人に依つてどうしても孝行の出来ない人があります。又人間にはどうしても逃れる事の出来ないものがあります。例令ばいやだ」と言ひながら厭な良人を有つて居る人が幾らもあります。晶子さんも考へて見ると五郎さんや兄さんと結婚の出来ない運命かも知れません」

「其の運命が不正であれば反抗するのが人間の尊い良心なのだ」

「待つて下さい、もう少し私に言はして頂戴。だから私は自由主義を取りますね。女といふものは男よりも弱いものです。獨りぼちねんと淋しく考へて居ると矢も楯もなく結婚がしたくなる時があるものよ。男には友達がある、獨身でも淋しくないけれども、女には友達がありません。學校に居る時に姉妹の様に親しい人でも、卒業してしまへば葉書一枚もよこさない様になるんです。それが女です。女には友達もなく親もなく姉妹もないのよ。あるものは只だ異性ばかり、良人ばかりです。それだけで生きて居るんですもの。私だつて慥うして五郎さんに戀をして

居ますが、その癖誰でも可いから早く結婚したいと思ふ事が何十返となくありますわ。外を歩いてもちよいとスタイルの好い人を見るとあの人は奥様があるか知ら、あつても構はないからちよいと戀をして見たいと思ふ事もあります。其れは男には解らない事です。女といふものは爾いふものです。だから晶子さんがこれほどまでに奥田さんの處へ被行やりたいたいならどしく被行やるが可うござんすわ」

「私ほそういふ心持ではありませんわ」と晶子は顔を染めて言つた。 *晶子の口は、女に對する愛を述べ、*

「早く身體が決めたいのです」

「戀ぢやないの？」と菊子は吃驚した顔で、

「奥田さんに戀をしたのぢやないの？」

「あの其れは……あの」と晶子は言淀んだ。

「戀でなくて何なの？五郎さんより奥田さんの方が出世をして虚名があるからなの？」

「えい、爾です」と晶子は決然と言つた。

「まあ爾なの？」と菊子は苦笑しげに言つた。「解りました。私は此の場限りで永久に貴方と絶交します」

牡丹臺

一

高梁は刈取られた。十月の平壤は冬の如く寒い風が吹いて大同江に映る白い雲は凍て付く様に重く低れて居る。畠も田も眞紅な色に霜枯れて其の上を力なき冬の日が泳いでゐる。牡丹臺の麓に散らばつて居る小さな朝鮮人の家は今丁度雲影が過ぎ去つたので思ひ出した様にはつと明るくなつた。家は臥牛に似たりと春畝公が吟じた通りの矮い壁造りの恰ら土竈の様な家の屋根は大方刈立ての高梁に蔽はれて鶏の聲牛の聲が長閑に聞える。五郎は壁の窓から顔を出して外を見やつた。紅い日は輝いて鶏の群が垣根の下に蹲まつて居る。垣の内に大きな石があつて其の上にバケツが載せてある。「柳さんが又忘れて行たな」

彼は慙う呟いて微笑した。而して瘦た姿をした柳小が豆腐を買ひに行つた其の背後つきを思ひ浮べた。

「何も平壤まで二里もある。豆腐なんか買ひに行かなくても可いのに」

日射を見ると二時過である。によき／＼と拳骨を突張つた様な枝の柳の影が窓に届けば二時である。彼は霎時凝と考へてる中に繃帯が弛んだので傷所の右腕を伸ばし、繃帯の端を口に啣へて左手で巻直した。爆弾當時に負傷したのは幸に右腕だけで、柳小が少娘ながら自分を背負つて走つてくれたので助かつたが、世を忍ぶ身は治療も不完全である。いつになつたら完全な身體になるだらう。少しばかり足部にも傷を負ふたが其れはもう歩ける位になつて居る。其れだけでもせめてもの慰めである。

「こんな事をして居て什麼ならだらう」

慙ういふ思ひは毎日の事である。懐に貯へが乏しくなつた。柳小の父は行方が知れぬ。全快したら何とか方法を講じなければならぬが、其れとても嫌疑を受けてそよ吹く風にも心を置く身は職業にありつき様もない。いつそ日本へ歸らうか。

「其れにしても實父の李成民は什麼なつたらう。柳小に聞いても解らない。爆弾と共に死んでしまつたのではあるまいか、但しは何處かへ落ち延びたらうか永梅吉其他は什麼したらう。全で夢の様だ。夢よりも不可思議だ。何の罪もない僕が何の悪意もない日本政府に睨まれてるのも不思議だ。政府のためでない奥田のためだ。而して低能な警察官のためだ。小さな役人共の低能からして良民が一生を誤られる様な事が頻々としてあるなど實に恐るべき事だ」

百感胸に溢れて彼は繃帯を巻く事を忘れた。聽て氣が付いて再び巻き直したが、口と左手では什麼する事も出来ない。腕の傷から油紙がめくられて黒く爛れた底から赤と白と褐色の肉が見える。彼は痛さをこらへて其れを振て見た。

「あ痛ッ」

思はず聲を立て、慌て、巻かうとした時柳小の足音が聞えた。

「柳さんか」

「はい」

「丁度可い處だつたよ」

「あら繻帶を取つたの？」

「うむ」

「痛い處を見ると猶ほ大きくなります」

柳小は、腐を入れた籠を棚の上に載せて入つて来る。瘦せては居るが十六の少女らしい柔かな頬に歩いて来た故か林檎の様な紅い色が潮して居た。ぐるぐる巻に頭に載せた髪をばらりと解くと一條の綱になつて腰よりも下に垂れる。

「おう痛い」と彼女は自分の事の様に言つて五郎の傍に蹲がみながら極めて巧に繻帶を出した。五郎の長い腕が柳小の肩先に掛つて、柳小は其れを荷ふ様に自分の頬で押し付ける、美しい指先が腕の周圍に出没した。而して其れを締める度毎に柳小は五郎の顔を覗いた。

「痛くないよ大丈夫だよ」

「怒う言ふと彼女は安心して又た締めかける。

「難有う、あ、これで可くなつた」

「痛い」と柳小は言つた。彼女は此頃極めて日本語が巧になつたが、敬語や主客の別などにな

ると折り／＼抱腹する様な滑稽な言葉があつた。

二

繻帶が終ると柳小は霎時五郎の顔を見詰めた。これが柳小の癖である。彼女はいつでも凝と五郎を見詰める。食事の時でも談話の時でも爾である。而も其れは決して日本の女の様に流目したり横目で窺み見をしたりする様な卑しい態度ではない。彼女は眞直に顔を擧げて見るのであつた。其の眞黒な瞳は堪まらなく清く神々しいものであると五郎はいつも思った。其れは碧眼の人種には見られない、東洋人特有の清淨な光であること五郎は發見した。

「實に氣持が可いよ、少しも痛くないよ」と五郎は腕を振て見せた。

「振ては不可いよ」と彼女は慌て、言つた。

「不可いよと言つちや不可、女の言葉は不可せんよと言ふんだ」と五郎は笑ひながら訂正した。

「不可……せ……ん……よ」と柳小は言つて見て「ませんよ」と繰返しながら立つて次の室へ去つた。飯の仕度に掛つたらしい。庖丁で彫む音がする。その間々に「ま……せ……ん……よ……男は不可

いよ、女は……ませんよ」と獨習して居るのが聞える。
 「可愛い奴だ」と五郎は獨りで言つた。が此時不圖思ひ出して、
 「柳さん」

「はい」と出て来る。

「お前錢がないだらう」

「あります」と彼女は答へた。

「併し僕がお前に與らなかつたぢやないか」

「でも……あります」

「どうして？」

「私ね、私ね」と含羞みながら歩み寄つて、「まだくある」

「どうしてあるんだ」

柳小は行塞つたが躓つて、掘て来ると澤山あります」

えい」

「何處から錢を掘るんだ」

五郎は驚いて訊ねた。

「宅の堀の下に御父さんが埋てあります」

「御父さんが？」

「えい、何時でもお金が要る時に彼處を掘れと曾日教へてくれました」

「併し御父さんは居ないぢやないか」

「新義州へ行つたと思ひます。宅は彼の儘にして人に貸してあります」

「人に盗られやしないか」

「い、え、御呪詛をしてありますから」

「うむ、併しそんな事をして置かないで皆な取つて来るが可いよ」

「取つて来ても可うございますか」

「うむ早く取る方が可い。いくら埋めたんだ」

「わかりません」

「慙う言つて柳小は又もや次の室に去つた。五郎は外を見やりながら種々な事を考へた。
 「韓人は銀行や政府を信用しないから大抵穴の中に金を埋めて置く、其れも道理だ。國を奪られたと思つて居るものが金も奪られると思ふのは當り前だ。僕の如きは生命を奪られかけて居るのだ」

柳小は膳立をして食卓に並べた。而して自分は白い胸掛を掛けて差向に坐つた。彼女は胸掛を食事の時の禮服と心得て居るらしい。實際外へ出るにも跣足の方が多し彼女には此の白い胸掛を掛ける方が至極好い思ひ付であつた。

「豆腐は什麼？」と彼女は訊いた。

「うむ、實に美味いよ、實に」と五郎は言つた。全く二里も先へ行つて五郎のために買つて来た豆腐を賞られないのが柳小の不服であつたのであつた。そこで五郎は又復賞出した。

「實に美味いよ、腕の傷が癒りさうだ」

柳小の顔は見る／＼喜びに輝いた。

「豆腐は傷の藥ですか」

「うむ、中々利藥だ」と五郎は笑ひながら言つた。

「では毎日買つて來ませう」

五郎も笑つた。

「お前は實に親切だね」と雲時あつて言ふ。

「爾よ、私は親切です」と彼女は率直に言つた。

「どうして其那に親切なんだへ」

此の間に柳小は少しくまごまごしたが、

「御父さんが親切にしろと言ひました」

「爾か、御前の親父さんは義理堅いね」

「爾です、御父さんは好い人ですわ。日本人よりずっと好い人ですわ」

「爾言はれても仕方がないな」と五郎は歎息した。

食事の済んだ頃は三時に近かつた。其日は風が穏かに日が一面に輝いて、日向に坐つて居ると恰ら春の様であつた。

「柳さん久し振で外へ出て見やうか」と五郎は言た。柳小は一寸首を傾けたが直ぐ賛成した。「何處へ行きませう」

「牡丹臺へ」

「でも牡丹臺は見物に来る日本人が多うございますから」

「なに可いよ、朝鮮服だから解らない」

柳小が調べてくれた朝鮮服に大きな朝鮮帽を被り、左に洋杖を突いて痛い方の足を劬はりながら五郎は家を出た。柳小は初めの中は心配さうに氣を配つたが段々五郎の元氣づいて來るのに釣込まれて次第に活潑になつて來た。二人はゆつくり／＼牡丹臺を登つた。例の事件以來外へ出たのは初めてである。日は暖かに枯葉の色が紅い、柳小は嬉しさうに頬を染めて居た。而し

て折り／＼五郎の腕に我が肩を貸して歩きながら、

「足が痛くない？」と訊くのであつた。

「大丈夫だ」と言ふと彼女は満面に笑を湛へて山を駆け登つたり又は鹿の如くに走り下りたり時には興に乗じてころ／＼轉がつて見せたりするのであつた。

「お前木登りが出来るか」と五郎は訊いた。

「出来ます／＼私大變に上手です」と彼女は答へたが直ぐさつと顔を赧めて、「私……女だから」ともぢ／＼した。

凡て恚ういふ風に柳小は有りたけの藝當をやつて五郎を喜ばした。其のいぢらしい志は五郎にもしみ／＼と嬉しかつた。二人は漸く牡丹臺に登つた。其處に一字の廟がある。其れは朝鮮の開祖箕子の碑である。迷信の強い朝鮮人は箕子に祈れば効驗あると信じて居た。だが日韓合邦以來箕子の信用が失くなつた。信と不信とに論なく石碑は依然として立て居る。文字は日に照されて石の古色が鮮かに輝いて居た。

「これが箕子の碑だ。此の碑が八道の山河を眺めて居る。山河は遂に昔のものでない。古碑靈

あらばどんな思ひがして居るであらう」

五郎は碑の前に腰を下して南の方を見下した。泊々たる大同江は青黛の色を流して居る、其の北岸の平壤は白堊や赤煉瓦や煙突や人家が押合つて居る。南岸に枯れた柳の並木が列なつて居る。田や畠や冬がれの野は限りもなく續く薄墨の交つた白雲と紛れて鈍い天色に溶けて行く、荒寥たる一望の景を控へて居る彼の平壤の市街は主權なんかは何れでも可いぞとふかの如く平氣に夕煙を立て殷賑のどよめきを遙かに傳へて居る。

「若し日本國が他の國に壓倒されて東京も京都も大阪も凡て他の所有となつた場合に、而して日本人が其れを高い山の上から眺めた場合には什麼な心持がするだらう」

五郎は今更ながら痛まじさが充滿になつた。

「柳さん」と彼は言つた。

「はい」と柳小は五郎の憐れだ顔を恐る／＼見上げた。

「お前は此の國が日本に取られて口惜しいと思はないか」

「いゝえ」と彼女は平氣に答へた。「どつちでも同じですわ」

「どうして？」

「私は知りません。私は貴方の御用さへして居れば可いのですわ」

「爾かな」と五郎は歎息した。而して口の中で「何方でも可い」と繰返して見た。

「其れが眞理かも知らん。其れが眞理なら人間に國籍が不要なわけだ。僕は日本人でも可し、朝鮮人でも可いのだ」

今まで日夜苦しみ抜いた難問題が此の無智な少女のために解釋された様な氣がした。

四

茶が欲しいと言つたので柳小は直ぐ半腹の茶店まで走つた。其れを見送りながら五郎は再び考へた。

「何方でも可いのだらうか」

此を決するまでに彼は石碑の邊をぶら／＼歩き出した。廟の背後は松が茂つて居る。松の幹も廟の柱も彈痕斑々と記されて居る。日清戦争の時、佐藤將軍が背後から突進し大島將軍が正

面から突進し、噂に名高き女武門の活劇を演じたのは此の處だ、國と國との争ひのために山河草木までが無惨の痛手を負はせられる、どうして國と國とが戦争するのだらう。土地の價値と血の價値と何れが貴重であるか。

五郎は又しても感慨に堪へなかつた。彼は松の根方を徘徊して一つく、に其の幹を撫て見た。お前も韓國の土に生れたものだ。僕も韓國の血を受けたものだ。だが僕は日本に移植されたものだ。僕は半韓半日の混血兒だ。

と見ると朽葉落葉の底を掻き分けた様に土の窪みから僅かに一尺ばかり頭を出して居る一つの棒杭があつた。杭は何人にも見分けられぬ様に草の葉や松の根株で蔽はれてある。五郎は不圖立停まつた。

「何だらう、これは」

よくよく見ると古木ではあるが文字の墨色が新しい。

「義人李成民之墓」

五郎は吃驚して讀み返した。

「義人李成民之墓」

「これが父の墓だ。父はあの時に死んだのだ。おう父は死んだ。彼は落葉の上に尻餅を突いて思はず墓を兩手に抱いた。」

「御父さん」と彼は生けるものに對する如く言た。御父さん、あの時貴方は死なれたのですね。御父さん、僕が最後に申上げた言葉は御父様をして却つて死を急がしめたのでしたね。御父様、僕は暴を以て暴に報うるを止めて飄然として故國を去り山の彼方海の彼方へ走つて其處に新らしき國を御建てなさいとお勧めしました。だが御父さんは矢張り韓人でした。愛する故國の土となりましたね。死んでも故國を離れませんでしたね。其れが御父さんの本望でせうが、御父さんはあの時僕が御父さんの子であると知らなかつたら見事に汽車を破壊したのでしたらう。我が子を育て、くれた日本の恩を思ひ、又同志に對する義理を思ひ、此に自ら暴を以て暴となれたといふ事は何といふ悲惨な事です。死なれた御父さんは其れで可い生き残つた僕は什麼すれば可いのです。御父さん、僕に其れを教へて下さると仰有るんですか。僕に日本人になれと仰有るんですか。御父さん、僕は

日は次第に暮れて松の木の間が暗くなる。とちらちらと落ちる松のこぼれ葉がかさこそと音すのさへ聞き取れるまで静かである。青と白と搗交ぜた夕暮の天色が松の梢から覗いて風が出たらしい。さあ／＼と響く松籟が身に沁み渡る、此の時人の足音が聞へた。五郎ははつと立退つて、

「柳さんか」と其の方を見やつた。足音がひたと止んだ。彼は黙つて耳を敬てた。何處からともなく砧の音が聞え出した。

「とんから／＼／」

長安一片の月に衣を擣つ聲を聞いて、腸を絞つた昔の詩人でなくとも、朝鮮の夕暮に聞く砧の聲ほど哀れ深いものはなからう。此の砧の合間／＼に又極めて悽愴な聲が聞へ出した。壁で圍まれた窓から夕月に仄白い顔を出した妓生が唄ふ亡國の聲である五郎は再び其處に倒れた。彼は凝と暮れ色の天を眺めた。涙は二つの目尻から溢れて耳の方へ垂れた。と此時廟の蔭から人の話聲が聞へた。

「私に構はないで頂戴。私一人で考へて居たいんですから」といふは女の聲。
 「考へるなら家へ歸つてからしなさい。日が暮ると歸りが難儀ですから」といふ聲は男である。
 「い、え、もう少しね。私の冥想を妨げない様にね」
 「又た他の男の事を思つてゐるんでせう。其れは不貞操といふものですよ」
 「何でも構ひませせんわ」
 五郎はむくと起上つた。而して突然に叫んだ。
 「晶さん」

五

「晶さん！」と五郎が叫んだのは殆んど突發的な無意識の聲であつた。若し晶子が其處に居るのだと的確に解つたのなら彼は決して叫ぶ筈がないのだ。だが餘りに不思議な場所其の人に似寄た聲を聞いた時、彼が前後を考へる暇もない中に、聲が既に唇を漏れた。

同時に五郎の聲を聞いた晶子は思はず聲を出した。

「あらッ」

「何を言ってるんです」と富男は言った。

「誰か、私を呼んだ様よ」

「空耳ですよ」と富男は笑つて、

「さあ歸りませう」

五郎は一旦起上つたが直ぐ立たうとしなかつた。

「あ、呼ぶんぢやなかつた」

彼は慙う思ひ返して暮色の木間を透して廟の方を見やつた。自分は暗いが向ふが明るい。着物は臙だか眞白い顔と房々とした廂髪の映りがくつきりと見える。疑もなき其人である。傍に立てる男は確かに富男である。葉蓑の煙をもやくと吐いて洋杖をくるりと廻し、

「兎に角歸る事にしませうよ。今晚は東京から來た雲井龍子のオペラがある筈ですからね、私は貴女をいろ／＼な淑女方に紹介したいと思ひます」

晶子は答へなかつた。而して黙つて五郎の方へ歩き出した。

「そんな暗い方へ行つて什麼するんです」と富男は制める様に従いて來た。晶子の姿が段々近くに近づいた。五郎は黙つて其の方を見詰めて居た。

「晶さんは結婚したのか、富男と結婚！」

頭がごととして石の如くなつた。餘りに驚くべき事であつたのだ。

「あらッ」

晶子の聲が頭の上にとつた。五郎は凝と顔を上げた。

「五郎さん！」

「何？」と富男は言った。而して五郎を見下して、「おう」

慙う言つたとき彼は棒立になつた。三人の眼と眼が互に輝いた。而して何んにも言はなかつた。

「歸らう／＼」と富男は慌て、言った。

「待て頂戴、あ、兄さん」

晶子の聲は涙に顫へた。

「歸らう」

富男は晶子の手を曳いて二三歩戻りかけた。
「待てッ」

五郎はすつくと立た。

「兄さん！」と晶子は富男を振拂つて走り寄り五郎の胸に顔を埋めた。

「兄さん！」

慙う言たが直ぐ泣き出してしまった。

「晶さん」と五郎は冷やかに言た。お前は どうして奥田と一緒に來たのだ」

「見物に……」と晶子は言た。

「見物は解つてる、お前は奥田と什麼いふ關係があるのか」

「其れはね兄さん」

晶子は慙う言て五郎の胸を離れた。全身ががたく、顔へ出した。

「晶さんは私の妻です。夫婦が同道するのは何も不思議ぢやないですからね。はあん」と富男

は嘲る様に言た。

「夫婦？」と五郎は晶子の手をむづと攫んだ時、右の腕が痛かつたので突き出す様に押した。

晶子はよろ／＼となつた。

「本當か、晶さん。そりや本當か」

「い、え未だ結婚しません」

「だが既に入籍をしました」と奥田は口を挟んだ。

六

「入籍？」と言つたまゝ、五郎は開いた口が塞がらなかつた。

「本當か」と彼は再び問ひ寄つた。晶子は黙つた。

「本當か」と三度叫んだ。

「兄さん、これには事情があります」

「事情？事情なんか訊いてるんでない。奥田と結婚したのは本當かと訊いてるんだ」

「嘘です」と晶子は微かに言つた。

「嘘だらう。嘘か、嘘か、爾か」

「でも兄さん、夫婦になるのです」

「何？」と五郎は肚の底から聲を絞つて怒鳴つた。「其れではお前、高井を什麼するんだ。お前は高井を殺すのか。お前は此の兄が何のために日本を飛出したのだと思つて居る。晶さん、お前は僕の心持を知らんのか」

「其れはよく知つて居ますけれども」と晶子は蒼白になつて言つた。

「お前はくお前は僕を死地に陥入れたのみか高井をも殺してしまふのだ」

「兄さん」と晶子は兄の前に跪いて、「私は死んでしまひたい」

「よしッ、殺してやる」

五郎は晶子の肩を左手に攫んで口惜しさうに揺ぶつた。途端に富男の洋杖が胸に閃いた。あつといふ間もなく五郎はばたりと倒れた。

「私の妻をどうしやうといふんだ」と富男は嘲る如くに言つた。

「何を貴様」

五郎は起上つたが足の痛さと腕の痛さに蹠跟となつた。

「生意氣な奴だ」

富男の洋杖が二つ三つ閃いた。五郎はびたりと坐つた。

「僕は負傷をしてるから貴様に抵抗はせん。さあ撲るだけ撲れ」

「可しッ」

「何をなさるんです」と晶子は富男の胸に縫つた。

「邪魔をなさるな、邪魔をなさると五郎君のために宜しくありませんぞ」

晶子はぶる／＼と身を顫はして泣いた。

「私は貴様に恨みがある。牛の一件の代償として此の洋杖を五十だけ貴様の頭に御見舞申さうぞ」と奥田は洋杖を振た。

「よし、撲れ」と五郎は無念の切齒をして兩手を拱み、「此の手が痛くなかつたら、此の手が……」
「最初は龜の踊りとござい」と富男は洋杖をくる／＼と廻した。途端に彼はあつと蹠跟した。

大きな石が彼の頬を掠めて飛んだのであつた。

「石を抛りやがつたな。此ん畜生」二度び洋杖を振上げた時第二の石が彼の肩先にはたと當つたので彼はがらりと洋杖を落した。同時に大小の石がばらばらと飛んで來た。而して白い胸に無數の石を拾ひ込んだ柳小の姿が木の間から現はれた。

「もつと行りませうか」と柳小は身構へして言つた。「一、二、三！」

「こらく、飛び道具は止せ」と富男は慌て、言つた。

「旦那様に失禮な事をするか」

「もう止す」と富男は言つて晶子の手を取り、「さあ歸らう」

「えい歸りませう」と晶子は決然と言つた。

「五郎君、君の首が胴に付いてるのは誰の御蔭だと思ふ」

慙う言つて富男は晶子を曳いて歩き出した。晶子は逆らはなかつた。五六間も行つたと思ふと彼女は飛鳥の如く戻つて來た。

「兄さん、口惜しかつたでせう」

「お前に用がない。行け、賣女め」と五郎は叫んだ。

「いろく御話したい事があるんですけども、御家は何處？」

「何處だつて畜生の知た事か」

「御家だけでも教へてね……」

「山の下です」と柳小は言つた。

「難有う、私ね兄さん」

涙が止め度なく流れて何んにも言へぬ。畜生と言はれ賣女と言はれるのも兄を救ひたいためである。其の苦しい胸の中を言ふ事が出来ぬとは何といふ因果な運命であらう。

「何をしてゐるんです」と富男は戻つて來た。

「只今、はい只今」と晶子は立上つて「では兄さん御機嫌よろしう」

捨言葉に匆々に彼女は富男の方へ立去つた。

「どうしても」と五郎は立ち直つた。「晶さん待て、僕はどうしてもお前を取戻して高井へ返さなきやならん」

よろ／＼と歩かうとするを柳小は確乎と捕まへた。
 「傷が痛みます。傷が痛みます」

七

極めて混乱した心持で晶子は富男の邸へ歸つた。富男は頻りに五郎の叛賊である事を舉げて
 慫う言つた。

「貴方と五郎君は實の兄妹でも何でもないのだから高い犠牲を拂つてまで五郎君を救ふ義理が
 ないのだ。寧ろその事、彼を警察へ渡したら什麼ですか」

「御約束が違ひます。晶子は苦々しく言つた。

「仕方がない」と富男は獨りて言つて、「貴方はどうする積ですか」

「兎も角も約束通りに致しませう。あの證據品を御渡しを願ひます」

「では結婚なさるんですか」

「はい何時でも」

「結婚してから逃げ出さるんですか」

「い、え逃げません」

「可し、では十一月の三日としませう。其の時には侯爵にも御臨席を願ひます」

「十一月の三日？」

「もう二十日ばかりの餘裕があります」

「承知しました」

「だが貴方は絶対に私に従順であつて下さるでせうね」

「はい」

「結婚の済むまでは貴方が無斷で外出する事を禁じます」

「何故ですか」

「五郎君に會ひに行くから」

「はい承知しました」

「若し勝手に外出なさると私は五郎君を告訴しますよ」

「何處へも出ません」と晶子は餘りの事に憤怒の涙を浮べて、「其の代りに貴方が無断で私の室に入る事を御断りします」

「宜しい」と富男も不精ぐに言つた。「併し一日一返だけ會ふ事にしませう」

「食堂でね」

「うむ」と富男は行塞つた様な聲を出した。

「晶子は黙つて自分の居室に入つた。而して倒れる様に寢椅子の上に身を投げて思ひきり泣かうとしたが涙が出なかつた。

「五郎さんが牡丹臺の下に居らつしやる。もう一度御目に掛りたい。そして何も彼も話して證據を取戻す計畫をしたい、だが」

「慙う思つた時扉の外を歩く人の足音がした。

「奥田だ」と彼女は思つた。此の様子では一寸も外へ出る事は出来まい。假令自分が出なくともせめて菊子さんや高井さんに知らしてやりたいものだ。爾だ、あの人達に五郎の居所を知らしてあげるのが一番可い事だ。彼女は慙う思つて手紙を書き掛けた。と足音が再び聞えて扉を

叩くのは富男らしい。

「何か御用ですか」と晶子は言つた。

「食堂へ行きませんか」と富男は言つた。

「今日は一返御眼に掛つたからもう御眼に掛る義務はありません」

富男は答へなかつた。足音が遠くなつた。晶子は再びペンを取り上げたが、此の時彼女は此の手紙を何人に託さうか、託しても多分富男に横奪されるだらうと気が付いた。彼女はたと困つたが、彼女は直ぐ卓上電話に気が付いた。

「あ、天の與へだ」

彼女は電話機の把手に手を掛けた時、再び扉を叩く音がした。

「何ですか」

「オペラへ行くといふ約束をしましたね」

「えい、爾です」と彼女は急に勇氣づいて、「参りませう」

「行きますか」

「はい」と晶子は起つて扉を開け、「支度を致しますからね、貴方も早く御召替をしい被來い」
富男は喜び勇んで去つた。其の後姿を見送つて彼女は電話を掛けた。彼女の胸は喜びに溢れ
た。そして高井や六藏や菊子がどんなに喜ぶかを想像して見た。

「……二百三十番」

電話の取次に出た男は聞き馴れた清風館の番頭の聲であつた。彼女は番頭の禿た頭を思ひ泛へ
た。

「私です、晶子です」

「あ、く御嬢様」

「高井さんを大急ぎで電話口へ！」

「えつ？」

「高井さんです」

「高井さんは被居やりません」

「では菊子さんを」

「菊子さんも被居りません」

「石尾さんは？」

「お三人とも貴方が出て御しまいになつた翌々日何處かへ行つて御しまひになりました」
「えつ？」と晶子は吃驚して、「何處へ？」

「ちりくでせうよ、御勘定が六圓と三十錢残つて居ます。其れは石尾さんだけ二三日残つて
居ましたので、其の御勘定の事に就て……」

「そんなものは何時でも拂ひます。三人の中一人だけでも解らないの？」

「さあ解つて居れば御勘定を戴くんですが」

「もう可いわ、左様なら」

晶子は電話を切つてから茫然と考へ込んだ。折角五郎の居所が知れると三人の行方が知れな
くなる。而して自分は捕虜の身である。

「さあ、行きませう」と富男は突然扉を開いて入つて來た。

「私は参りません」と晶子は言た。

「えつ？」と富男は驚いて、「併し約束は？」

「私頭痛が致しますから」

「はあん」と富男は妙な聲を出して、「病氣か、成程、病氣か、はあん、仕方がない、はあん」

八

自分が出た許りに三人も宿を引上げる様になつたのだらう。日本へ歸つたか但しは何處かを尋ね廻つてるか、五郎さんが牡丹臺の下に居るとは夢にも知らぬであらう。晶子は氣狂はしきまでに考へたが此の場合に處すべき策を思ひ出せなかつた。

彼女に從つて置いた女中といふのは耳が遠く鈍重な婆さんで迎も文使の役に立つべくもない此の上は力に頼むのは電話だけである。清風館の番頭に頼んで三人を搜索して貰はう。慙う思ひついたのは其の翌日であつた電話機の把手を廻したが一向手應へがない。

「室内電話を切つたのだ」

慙う氣が付いた時彼女は最早絶望の淵に沈んだ。

警戒は中々嚴重となつた。夜中に眼を覺すと戸の外に人の息が聞ゆる。窓を開けると其處にも人の影が見える。晶子は全然牢獄の人となつた。縦令警戒が是れ以上に厳しくとも逃げ出さうと思へば逃げられない事はない。併し逃げ出したが最後、富男が直に五郎さんを告訴するだらう。

晶子は十重二十重に身を縛られた様な氣がした。彼女は一日に一回づ、富男と冷たい會食をするだけであつたが、其れは恰ら悪魔と尊を同する様な心地であつた。其の綺麗に掃除の行届いたびかくした顔や、細い指先や、氣障な言葉つきや野卑な態度は一目見ても慄然とする位であつた。而も其の憎惡の念が日に益々募りゆく。彼女は食事の時間を縮めるために型ばかり箸をつけるだけで匆々にして室へ逃げ込むのであつた。彼女が嫌へば嫌ふ程富男の戀が募つて来る。

一日富男は晶子に慙う言つた。

「貴方は此頃一向食が進まない様ですね」

「はい、氣分が悪うございますから」と晶子は答へた。

「気分が悪いなら散歩に出なさるが可いですよ。どうです一緒に出て見ませうか」

「い、え私は散歩に出たくはありません」

「はあ爾うですか、では什麼です、今夜樂劇を見に行きませうか、東京から女優が澤山来た様ですよ」

「い、え私は外へ出るなら只だ私一人だけで出て見たうございますわ」

「はあん」と富男は面目を失つて「私と一緒にはお厭なんですね」

「誰方とでも厭です」

其の場は其れきりで済んだ。と其の夕方小間使のお琴といふが室へ来た。お琴は耳の遠いお婆さんと違つて東京生れだけに氣も軽く親切な女であつた。

「お嬢様」と彼女は例の明るい聲で言つた。「御退屈で被居やいませう」

「えい、お前來られないもんだから、話相手がないのよ」

「私も伺ひたいと思ひましてもね。旦那様が此室へ伺つちや不可いと仰有るもんですから……でも今日は御許しが出ましたのよ」

「どうして？」

「お嬢様のお室へ伺つても可い其の代り何でもお嬢様に御意慰させない様に御相手をしておけたらと怨つ仰有やつて……」

「奥田さんは？」

「只今ね、瀧田さんと御一緒に玉突に被行やいました。ですから私はね、此頃新聞で評判の樂劇へお嬢様の御件をして行て見ても宜しうございますかと伺ひましたら、宜しいと仰有やつてでございます」

「奥田さんも行くのぢやないの？」

「い、え、今晚は俱樂部の方だちで玉突の會だとか仰有つてでしたから」

「樂劇かへ？」と晶子は打案じて、「私別に行きたくもないわ」

「でもお嬢様、大變な評判でございますわ。何とやらいふ女優が……あ、爾々沖野鷗とかいふまあ大變な美人で大變に好い聲で大變にまああのう……」

「大變だらけだわね」と晶子は笑つた。

話の大袈裟なのは東京女の常である。五分の事を十分に言はなければ何となく物足りないお琴は世間の噂や新聞の記事などをもつと誇張して楽劇の事を語るものであつた。

「何でもねえ御嬢様、沖野鷗といふ女優は華族さんの御姫様で、華族女學校を出てから伊太利で十年も修業して巴里に五年も居て外國で大變に名高くなつた方ですつて」

「もう大分年が老つてるの？」

「いゝえ二十歳そこゝなんですつて」

「でも女學校を卒業してから伊太利に十年も居たのならもう三十過ぎだわ」

「では伊太利へは行かないのでせうか」

「巴里に五年居たつて二十五六になるわ」

「巴里とは何處なんですか御嬢様」

「佛蘭西だよ」

「佛蘭西は此の朝鮮より遠いんでございませうか」

「そりや四十日も五十日も掛らなきや行けないわ」

「へえ」とお琴は呆れて「それでは巴里へも行かなかつた事に致しませう」

「まあお前の大袈裟にも呆れるわね」と晶子は腹を抱へながら、お前が爾那に言ふのなら行つて見やうかしら」

「えいゝ被行やいまし、今まだ度可い時刻なんでございますよ。六時ですから丁度ピアトリ姉ちゃんの處でございますよ」

「なあに？ピアトリ姉ちゃんて」

「ピアトリ姉ちゃん、又た寝ん寝かへ、鼻から提灯を出して……唄はトチチリチンと申しますの」

「まあお前は中々巧いのね」

「何だか存じませんけれども面白そうでございますよ。長唄や常磐津なんてもものよりすつと可うございますわ」

お琴の輕口に晶子はすつかり氣が浮き立た。元より富男が承知の上ならお琴と共に往ても差
 問えなからう。晶子は恚う思ひ定めた。

「さあ、御召替遊ばせ、御歸りはお寒うございますから御羽織の上にごうとをお召になつて
 其れから席が汚なうございますから私が毛布を持つて参りませう。其れから何か召上りものは」

「お前も矢張り何かへ大阪や京都の人の様にものを食べながらお芝居を見る方かへ」

「い、え、御嬢様、私は決してそんな卑しい事を」とお琴は顔を赧めて辯解した。彼女は自
 分の生れた東京ほど立派で綺麗で順良で高尚な土地はないと信じて居る。だから彼女は東京人
 は他の地方の人間よりもすつと一段上級に位するもので、東京人でないといふ事は非常に耻辱
 の様に思つて居る。

支度が済んだ。二人は自動車に乗つて劇場へと出掛けた。劇場は観客で充満であつた。其
 れは朝鮮は内地と異つて娯樂物が少いためと今一つは樂劇が始めてあるためであつた。凡て
 恚ういふ娯樂物は如何なるものにせよ、目先が變つて美しく賑やかで而も新聞の提灯が盛で
 ありさへすれば必ず人氣を集注するものである。劇場の名は東京スター樂劇團といふのであつ

た。二人が席に着いた時デアボロの曲が佳境に入りつ、ある處であつた。

「岩に凭れたもの凄いな人は、鐵砲片手にしかと抱いて」と二人の男が唄つて居た。見物人は無
 闇と拍手喝采した爲めに唄は能く聞き取れなかつた。音樂の途中で拍手喝采するなんて田舎で
 なければ見られない事だと晶子は一種の興味を感じた。

幕は直に降りた。見物人はものを食ひ初めた。中には刺身や天麩羅の大きな鉢を並べて酒を
 飲むものもあつた。是等の人は互ひに語り合つた。

「どうです狂言の筋が解りますか」

「何が何だか解りませんな」

「これは西洋人には解るでせうな」

「西洋人にも解りませぬまい。あれでも日本語ですからな」

「はあ、西洋人にも日本人にも解らない。なるほど羅馬字の様な芝居ですな」

解ると解らないは人氣の上に消長がなかつた。只だ輝かしい電燈の光を浴びて若い女優達が
 唳る様な樂隊の調子に作れて腰から下が露はになるまで裾を捲くり上げて踊るのが珍らしいの
 であつた。

晶子は席に着くや否や先づ第一に見物人の群から蒸し騰る氣氣を感じた。其れに電燈の光
 樂曲と肉聲、色彩に富んだ俳優の衣裳、其等の集合から成立つ一種の興奮した刺戟は歡樂より
 も寧ろ壓へつけられる様な呼吸苦しさであつた。

最初の中は觀客も解らぬながら音樂の響に好奇心を魅せられて居たが、いつまで経ても同じ
 音調と同じ色彩なのでそろそろ倦意を生じ出した。實際此のスター一座は極めて貧弱な團體で
 樂劇とはいふもの、音樂はめちやくで俳優も拙劣で、全然調子外れの唄は觀客に惡感を催せ
 しむるものであつた。觀客は次第に欠伸をし出した。そろそろ歸るものもあつた。怒聲罵聲が
 湧いた。そして觀客其れ自身が互ひに爭論を始めた。

晶子は一方に厭な感じはあつたが、併し單に樂隊の響だけは氣持が快いと思つた。こんな
 沸騰した會場でも凝と耳を澄まして居る中に漸々知らぬ他國へ引き込まれる様な氣がする。
 殆んど牢獄に等しき家の中に幽閉せられてる境遇も彼女に取つては何でもなくなつた。而して
 柔かい夢の様な國へ魂が飛んでゆく。彼女は眼に觀客の頭や顔を見たり又た俳優の衣裳な
 どを見たりしながら其れよりも全然異なつた冥想の渦卷に身を任せた。此の時觀客共は益々
 騒々しくなつた。

「木戸錢を返せ〜」と聲々が叫ぶ。

「賈ひもの、樂劇をぶつ潰してしまへ」と他の聲々が叫ぶ。

「早く鷗の獨唱をやらせろ」と別な一群が叫ぶ。觀客は殆んど總立ちになりかけた。と緋色の
 緞帳がする〜と上つて、其處に森の少女に扮した洋裝の姿が見へた。桃色の服に同じ色の廣
 いリボンで鉢巻をした頭からブコンドの髪が零れて居た。

「鷗だ〜」と觀客は嗚を靜めた。細い踵の高い舞踏靴を軽く運んで少女は會釋した。觀客の
 罵聲は拍手喝采と變じた。少女は唄ひ出した。

When will you come again——

透き徹る程聲は美しい。をどをどした舞臺慣ぬ態度は見物人の同情を惹いた。

My faithful Johnny——

晶子ははつと空想から目覺めた。彼は丁度、富男の事を考へて居たのであつた。如何にして富男の手から逃るべきか、結婚の期日は眼前に迫つて來た。其れを逃れるには……慙う考へた時舞臺の上から聲が聞えた。

「あ、あ、あの唄は！」

顔を上げて見やると、舞臺にピンクの少女が立て居る。

When will you come again——

「あら！」と晶子は思はず聲を擧げた。

「菊子さんだ」

彼女は先づ自分の眼を疑つたが其の顔や其の聲、其の調子の終りが少しく顫えを帯びる處まで菊子に違ひはない。

「どうしたんだらう〜」

晶子は夢の中に驚いて、覺めて又た驚いた人の様に、不可思議とも何とも言ひ様のない氣持で只だ茫然と立ち盡した。

見物人は再び拍手喝采した。幕が靜かに降りた。

「何といふ美聲だらう」と隣の一人が言ふ。

「悪ずれて居ない處が實に可い」と又た一人が言ふ。

一一

菊子が女優にならうとは什麼して信じ得やう。併し確かに菊子に違ひない。これには何か事情があるだらう。例の自由思想からして好んで藝術の世界へ入籍したものが、但しは生計のためには藝を賣るべく餘儀なくされたのか、藝術は神聖であるにしろ、此のスター一座の様な頽廢した田舎廻りの群に身を投ずるといふ事は菊子さんとしても餘りに突飛である。菊さんが決心しても高井さんが制めなさるべき筈だ。して見ると誰にも相談をなさらずに慙那事をなすつ

たのだらうか。若し私が傍に添いて居たら絶対に反対するのだが……其れにしても此の儘には捨て置かれぬ。私のために御自分の戀を抛つて共に朝鮮くんだりまで兄さんを探しに来て下すつたのだもの、其の恩返しにも何とかして菊子さんを此の汚濁の溝から救はねばならぬ。晶子が愆う考へて居ながらも胸のどん底にもつと大切な問題が潜んで居る様な気がしながらも、其れが何であるか思ひ出せなかつた。

「菊子さんは自暴になつたのだ」と彼女は不圖思つた時俄然として新たな光が頭に閃いた。其れは實に何とも言い様のない生新な光であつた。ほんの一瞬間、此の一瞬間の閃きは彼女の全身を全然別なものに洗ひ上げてしまつた。彼女の頭は丁度睡眠不足の人が腫れぼつたい心持で雨戸を開いた時、すがくしい曉の光が微風と共に顔を吹いて来る様な氣持であつた。彼女はほつとした。と同時に彼女の眼は輝き極めて清浄な空氣が血管の中に透き通つた。

「私が戀を捨てれば可いのだ。そして菊子さんと兄さんとを御夫婦にすれば菊子さんは決して自暴にならないのだ」

「其れがお前の責任だ」と彼女の良心が肚の底で叫んだ。

「爾だ、あ、私どうしてこれに氣が付かなかつたのだらう。私はどうせ奥田の捕虜で一生を暮さなければならぬ身體だ。其の手を逃れた處で兄さんの秘密を許されるばかりだ。戀は我が慾望を遂ぐるばかりが目的でない。本當の戀は其人を幸福にするにあるのだと兄さんが仰有つた事がある。私の取るべき道は其れなのだ。爾しなければ菊子さんを救ふ事は出来ない。私のため失望なすつた高井さんに對してさへ私はお氣の毒で堪まらないのに菊子さんまで墮落さしては私の義理が濟まない。あ、私今までどうして此に氣が付かなかつたのだらう」

晶子は微笑した。自らを死地に陥れて而して他人を光明へ救ひ出さうといふ決心に伴ふ微笑！此の微笑は晶子の生涯中最も鮮かな、靈魂の満足から自然に制へる事の出来ない最も尊ひ微笑であつた。

「爾だ、私は菊子さんに會つて忠告させよう。そして兄さんが牡丹臺に居らつしやる事を知らせませう。爾だ、今が最も好い機會だ。早く行て知らしてあげやう。兄さんの事を……そして高井さんや六藏さんの消息も聞きませう」

彼女はつと立つた。

「どちらへ？」とお琴が言ふ。

「楽屋へ行って見たいわ」

「あら楽屋？」とお琴は驚いた。

「あの、鷗さんといふのは私のお友達よ」

「あら、まあ、爾ですか。あら」とお琴は妙な聲を出して、「楽屋には男の役者も一緒にございませうか」

「あ、爾でせうとも」

「へえ」とお琴は顔を赦めて、

「何んだか體裁が悪うございますわね」

一一一

晶子はお琴と共に廊下へ出た廊下の突當つた處に扉が半分開いて居る。其處から薄闇い内部が仄かに見へた。背景の張棹が幾枚も立てかけられて右は大きな太鼓と角な大火鉢が路を塞い

で居る。張棹と太鼓に妨げられて其處を行く人は身體を横にして歩かなければならなかつた。丁度幕の終りとして腰に鐵槌を差した道具師共は非常な勢ひを以て背景を引込まして居る。其の間を洋装したオペラの俳優達が火事場を逃げる様な足取りで素早く潜りゆく、樂屋の方から覺えない灯の光が是等の騒々しい光景をパノラマの如く照らして居る。晶子とお琴は中に入りかねて躊躇した。鐵槌の音や足音や道具を引摺る音が益々騒々しく高まつたが直に静まつて、見物席で御茶や蜜柑や菓子や菓子を賣る賣子の聲と群集のいきりだけわつと聞こえた。舞臺は花やかな灯の光りで満ちて居るのに背景一枚裏の樂屋は闇に鎖されて居る。晶子は慙う思つて役者生活の内部に潜む悲哀な影を想像した。

「狂言さん、二丁にして下さい」と闇がりから聲が聞こえた。

「おう可し來た」と別な聲が聞こえた。而して拍子木を二つ程打つた。間もなく役者の姿がちらちら見え出した。

「あれがお嬢様、先刻の御爺さんでございますよ」

お琴が一人の役者を指して言つた。其れは青い縷子の上衣に緋色の洋袴を穿いた若い男で白

髪かみの鬢かみを脱ぬいで又また被かり直なす處ところであつた。

「滑稽こつぱいな御爺おぢいさん」とお琴ことは前幕ぜんまくの事ことを思おもひ出だして笑わらつた。御爺おぢいさんは一寸ちよつと向むかふの暗くらがりに向むいて手招てまきした。若わかい美うつくしい、而そして裸はだかを裸はだかにした少女せうじよの扮装はんさうをした女優ぢやゆうがちよこく走はしつて來きた。二人ふたりは晶子あきこやお琴ことの方ほうを見みいゝ、囁ささいて居ゐた。

「止よしませうか」と晶子あきこは言いつた。

「でもお嬢様ぢやうさまが御用ごようか御ごありなら……私わたし一寸ちよつと聞きて見みますわ」

お琴ことが中なかへ入はいりかけた時ときお爺ぢいさんの役者やくしやが歩あるいて來きた。

「何か御用ごようなんですか、誰たれか御面會ごめんわいに……」

「はい、鷗かもめさんとか仰おつしや有ある方かたに」とお琴ことは言いつた。

「鷗かもめさん？、はあ成程なるほど」とお爺ぢいさんは向むかふを見みやつて「鷗かもめさんの部屋へやは何處どこか」と高聲たかこゑに行いつた。

「階子段はしごだんの上うへの處ところ」と女をんなの聲こゑがした。

「此方こちらへ被來いらつしやい」とお爺ぢいさんは二人ふたりの女をんなが白足袋しろたひで汚きたない板いたの上うへを歩あるくの氣きの毒どくさうに見みや

りながら言いつた。

「入はいつても宜よろしうございませうか」

「あ、可いいですとも鷗かもめさんの出場でじやうには未まだ五分間ぶんかんばかり間まがあります」

お爺ぢいさんに伴つれられて二人ふたりは薄闇うすやみの中なかを探さがり、背景はいけいの間あひだを潜ひそり抜ぬけて行いつた。其處そこに汚きたない階子段はしごだんがあつて、上うへからいろいろに扮装はんさうした男女だんぢよの役者やくしやが降おりて來きた。其れ等それらと撞すれちがひに

お爺ぢいさんは階段かいでんの中程なかほどで聲こゑを掛かけた。

「鷗かもめさん」

「はい」と階段かいでんの上うへで菊子きくこの聲こゑがした。

「御容ごようさん」

「咎かう言いつてお爺ぢいさんは二人ふたりに、「直ちき此この上うへです」と階段かいでんを降おりた。二人ふたりが階段かいでんを上あると右みぎに大きな部屋へやがあつて縁へりのない疊たたみを敷しき詰つめた片側かたがはは板間いたまになつて居ゐる。窓まどに面めんして鏡かがみが幾いくつも幾いくつも並ならべられ、鏡かがみの上うへに電球でんきうが一人ひとりに一つづゝの割合わりあひで吊つりされてあつた。丁度ちやうど其處そこでダンスの稽古けいこが初はじまつて居ゐた。

「此方へ廻るんだよ右の方へ、一二三だそら可いか」

男の役者が女優の腰を押して肩に摺まらせながら廻轉を繰返して居る。

「右の方だよ。君は右と左を知らんか低能だね」

女優は涙ぐみながら眞赤になつて覺束ない足を動かした。

「悲惨なものだ」と晶子は猿芝居の猿を思ひ出して口の中で言った。

一三

ダンスの稽古をして居た大部屋と反對の側に小さな室があるのに二人は氣付かなかつた。稽古の役者達は二人の姿を見て一寸稽古を止めた。

「鷗さんの御部屋は？」と晶子が其の人に訊ねた。

「それが爾です」と直き向ふの方を指した。いかにも階段の上の右は大部屋で、左には小さな室が幾つもあるのだと解つた。其處の入口に沖野鷗子と書いた細長い紙札が貼られてあつた。「お前は此處で待つて、おくれよ」

晶子はお琴に憊う言つて小部屋の方へ曲つた。

「七つの峠は晴れ渡る、王様の馬は黄金の馬、お供の馬は泥の馬……」

惚れふとする様な美聲が室の中から聞えると同時に桃色姿の菊子が軽やかにひらりと飛んで来た。

「菊子さん」と晶子は入口から呼び掛けた。菊子はひたと停まつて身體を反らす様に前進の力を支へながら凝と晶子の顔を見詰めたが、喜悅と悲しみと混乱した何とも言へない色が其の顔に表れた。

「久澗ね菊子さん、まあどうして恚那になつた？御兄さんは什麼なすつて？」と晶子は抱き付きたい様に寄り添ふた。而して菊子の手をぐつと握りしめた。

菊子は黙つて首を低れた。

「貴方が女優におなりなすつたとは什麼しても思へなかつたわ。私會ひたかつてよ、本當に會ひたかつたわ。今貴方を舞臺で見た時どんなに吃驚したでせう。矢張貴方でしたわね。まあ私嬉しいわ。いろいろな話があるのよ菊子さん」

晶子はもう懐かしさが充滿になつて此儘菊子の首筋に接吻したいと思つた。其の手は友情の熱氣に顫へて胸には涙ぐましき愛の血が跳つた。

菊子は黙つて居た。

「今お忙がしければ私お済みになるまで待つて居るわ」

「私は知りません」と菊子は漸と口の中で言つた。其れは極めて弱々しい聲であつたが口火が小さくとも爆發が強烈である様に彼女は直に確也した聲で屹と言つた。

「私は貴方と絶交した筈です。私は貴方に御訪問を受ける筈がありません」

晶子は吃驚して何にも言へなくなつた。そして握りしめた菊子の手を放し、「貴方は未だあの事を思つて被居るの？」

「勿論ですわ。私は女ですもの戀を玩弄にする様な女は女の耻曝しだと思ひます」

「でも其れはいろ／＼事情があるんですから」と晶子は謝まる様に云つた。

「事情は誰にだつてありますわ。どんな事情があつても自分の良心を結く程いやらしい事がありますか。私は貴方を憎みますわ。死ぬまで憎みますわ。歸つて頂戴」

「菊子さん」と晶子は涙をほろ／＼と零して小聲に言つた。「私の悪い點は謝まりますわ。私はどうしても言ふに言はれない辛い立場に居るんですもの、何れはお解りになる事があるでせう。今の處では何んにも言へませんものねえ」

「貴方の愚痴を聞いても仕様がなわ。だけれども若し五郎さんに會つた時私達は何と言ひませう。貴方をむざ／＼奥田の手へ渡したと聞いたなら五郎さんは私達を何と思ふでせう。いゝえ

五郎さんが何と思つても構やしない。只私は口惜しい。あんなに男らしいあんなに純潔な五郎さんが貴方の様な浮薄な女を愛したのかと思ふと私は口惜しいわ」

菊子は此處まで言つて肩を顫はしたが、「歸つて頂戴」と怒鳴る様に言つた。

「其れはね、私からもよく五郎さんに言つてあげやうと思ひますわ。ですけれどもほんの一瞬間逢つただけですから……」

「五郎さんに逢つたの？」と菊子は言つた。

「えい牡丹臺の上で」

「えつ？牡丹臺の？」

菊子は思はず晶子の兩手を握つた。
 「五郎さんは何處に被居るの？何處に？」
 「其れはね」
 途端に晶子の身體がぐつと引分けられて富男は二人の間に立つた。
 「晶さん、樂屋などに來ては不可よ。さあ歸りませう」

三人

朝鮮の冬は寒さが烈しく大同江を渡る風は旅人の腸を凍らす。満々たる凍雲と満目の荒地を眺めて五郎は依然として淋しく其の年を送らうとして居る。十二月の二十五日といへば今年も餘す處僅かに五日である。傷は癒つたが寒さの烈しい日は總身の骨が疼き出す。滿洲へ走らうか、日本へ歸らうか、其れとも南洋無人の島に渡つて開墾をしやうか、落々たる壯心を横たへながらも彼は未だ遠き旅をするまでには全快しなかつた。何れ一陽來復の春にもならば其の時機が來ぬでもなからうか、差向き困るのは其日々の生計である。柳小が土の底に貯へて居た金は幾何あるか知らないが其れすら元とく、彼女の父が苦辛して貯蓄したものである。いつまで厄介になつて居らるべきものでない。身體が健康なら土方人足になつても彼女を養つて行

けるのだがと五郎は淋しく溜息を吐いた。此時裏口に微な足音がした。
「柳小さんか」

「はい」

柳小は箆に芋と玉葱を入れて其れを抱へる様にして入つて来た。

「只今！」

「買物か」

「えい」

「錢があるのか」

「えいありますわ」

「濟まないなあ」と五郎は痛い方の腕を擦つて「柳さん日本へ行かうか」

「貴方が被行やるなら何處へでも」と柳小は美しい眼を向けて「私ね、今聞いてみましたのよ、温泉へ被行やると傷が直癒りますつて」

「爾だ、温泉は一番好いんだがなあ」

「被行やる？」

「うむ、錢がない」

「私持つて参りますわ」

「併しお前の金を費ふわけには不可よ」

「何故？」と柳小は不思議さうに言った。

「何故つてお前の御父さんが一生懸命に貯めたんぢやないか」

「でも貴方のために費ふなら構ひませんわ」

「併しね、僕も男だ。お前の血を絞る様な事は断じて出来ないよ」

五郎は恚う言つて首低れた。柳小はまぢく／＼と其の眼を瞬いて居たが、聽て室を出た間もな

くざあ／＼と水を流す音が聞える。

「氣の毒だなあ」と五郎は思はず獨りで言つた。何の縁故もないものが只だ一頭の牛のために絶つても絶られない間柄となつてしまつた。此方でも恩に着せる程の事でもないのだが、苟且の行掛から父子は生命を的に盡くして呉れる。特に柳小は漸と十六歳の小娘で、父に別れたのを

悲しいとも思はず、僕を信すればこそ骨肉も及ばぬ親切介抱にいやな顔一つした事がない。人間の因縁ほど不思議なものはない。

五郎が怨う考へてる中に柳小は玉葱を刻みながら庖刀を置いて凝と考へたり。今途中で聞いた温泉の話、其れは南の山中に温泉があつて打撲傷、火傷、骨膜炎、癩癩質に特效があるさうだ。大抵のものは重きものも二十一日にして癒る。輕きは五日か七日、其れだけ効験があるものなら什麼かして一日も早く湯治に行きたいものだ。其れにしても先生は私のお金を費ふのはお厭だと言ふ。縦令お厭と仰有つても病氣には替へられないから、吐られても可いからあのお金を掘て来やう。

彼女は俎の上に玉葱を載せたまゝ、竊と足を忍ばして家を出た。夕日はきらりと大同江に光つて冬雲が灰色に廣野を壓した。

二

柳小が出て行た後で五郎は猶ほも冥想に耽つて居た。日が段々に沈んで室内は昏くなる。併

し柳小は洋燈を點しに来ない。

「おう何時の間にか暗くなつた。柳さんく〜」

呼べども答がない。五郎は身を起して臺所へ行つて見ると俎板の上に玉葱が載つてあるきりで柳小の姿が見へない。

「柳さんく〜」と二三度呼んだが矢張り答がない。

「何處へ行つたのだらう」

怨う呟きながら彼は水瓶を覗くと水が無い。

「可しく、僕が水を汲んで置いてやらう」

彼は瓶に水を汲み、玉葱を刻みながら又も考へた。

「凡ての日本人に捨てられた僕が只だ一人の朝鮮の少女に助けられるとは實に不思議だ。不圖上を見ると煤に燻ぼつた壁の隅に二尺ばかりの板片を打ちつけてある。其の上は大は五

六寸から小は二三寸位の土の像が幾つもく〜立て居た。其れは寒山拾得の様な顔もあれば布袋の様なものもある。頭は虎で身體が人間なのや牛や馬の形をしたのや千様萬態であるが其中に

一つ長い髻を垂れた羊の様な老人の顔があつた。額に二本の角を生やして兩袖を捲き合はした處に靈芝の様な棒を持って居る。其の眼は特に美しく見へた。竈の火がほら／＼と燃え上ると其等の幾つもの顔が押し合ひへし合ひ互に囁くかの如く思はれる。

「變なものだなあ、これが朝鮮の神様なんだらう」

「慙う思つて五郎は竈を踏臺にして一つ／＼土偶を下して見た。日本も朝鮮も同じ事で、不細工な土製の上に幼稚な繪具で着色した極めて詰らないものなので五郎は思はず獨りで笑つた。

「こんなものを祭つてるんだね」
再び上を見ると奥の方に紙片が一ぱいに溜つて居た。而も其れは細長く短冊形に裁たものである。

「何を書いてあるんだらう」

彼は小さな陶器に盛た飯が未だ乾からびもせずにあるので毎日／＼取換へて居るのだと思ひながら紙片を摘み出した。

「病疫平癒祈禱」といふ字が鮮かに讀まれる。

次の紙片には「鹽だち一年」と書いたのがあつた。其の次には「あまいものを食べません」其の次には「毎日一本づゝ髪の毛を抜きます」

五郎は初めは何の意味が分らなかつたが、次第に驚きと感謝の念が湧いて來た。

「僕のために祈つてくれるのだ」

曾日手習の時に鹽といふ字は如何書きますかと訊いた事があつた。其れは此の祈願を書くための準備であつたのだ。鹽を絶ち甘いものを絶ち髪の毛を一本づゝ抜いて僕の平癒を祈るとは何といふ有難い者だらう。彼は胸いつぱいになつて青い韓服を着た少女の姿を思ひ浮べた。そして又次から次の紙片を讀んで見た。最後に——一番底の方に紅い紙が幾枚もあつた。

「おやこれは紅いんだね、おや頭の方が少しづゝ焼いてある」

「二十五歳の男」

「十六歳の女」

五郎は凝と考へたが思はず、「あゝ」と聲を出した。二十五歳と十六歳は彼女と自分である。

「子供ぢやないんだ」

突然恚う言つて彼は竈を下りた。幼けれども戀を知つて居る。父を助けてくれた恩を感じるに付け其尊敬が何時の間にか戀と變じた。彼女が果して寔に僕を戀してるならば……あ、果して爾だらうか、十六歳の少女！而も裾を褰けて跣足で歩き廻り木登りを誇るあの野獸の如き少女が、

竊と元との如くに神棚を整理して彼は洋燈を提けて室へ戻つた。柳小は未だ歸らない。彼はそろ／＼空腹じさを感じた。彼は本を読み初めた。空想が果てしなく擴がり出す。一時間は過ぎた二時間は過ぎた。柳小は未だ歸らない。何處かで犬が頻りに鳴き出す。

「迎ひに行つて見やう」

彼は立て帽子を被つた。外へ出やうとすると裏口に人の影が見える。

「柳さんか」

「えい」といふ聲は涙に濕つて居る。

「どうしたんだ」

「お金は……皆んな盗まれてしまひました」

三

穴に埋めた金は何人かに盗まれてしまつた。五郎を温泉へやつて療養させる望みの綱が絶れ果てたのみか、明日からの生計向にも差支ねばならなくなつた。

「誰か、穴を發見したのだね」

「えい、日本人ですわ。靴の痕がありましたもの、日本人でなければ朝鮮のものを盗りやしません」と柳小は早口に言つて、

「御免なさい日本の悪口を言つて」

「警察へ訴へたか」

「い、え」

「なぜ？」

「貴方が此處に被居る事が知れると不可いから」

「うむ」と五郎は行塞つて、「可しく、金がなくつたつて構はんよ」
 慙う言つたもの、五郎の肚の中に何とも言ひ難い苦惱が湧いた。

「明日から什麼しやう」

什麼しやうといふまでもない事である。一個の男子が何の縁故もない朝鮮人の娘に養はれて居るといふ事が既に恥辱である。縦令心の中では全快したら今までの費用を十倍にも五倍にもして返してやると思つて居るもの、其れは自己の良心に對する辯解のみで、現に寒い風が一吹き吹けば身體中の骨が疼み出す、目下の状態では何時此の恩を返せるか知れやしないのだ。人の懐を當てにして生きて來たのさへ恥辱千萬なのに、今後は益々柳小を苦しめなければならぬ。

「此の腕が自由になつたならなあ」と彼は思はず叫んだ。柳小は黙つて五郎の顔を見詰めて居たが、臆て取繕る様に言つた。

「先生、貴方が私に心配させまいと思つて私を棄てる様な事があると私は死んでしまひます」
 五郎は愕然として吾に復つた。實は五郎は其の事を考へたのであつた。

「そんな事はないよ」と彼は靜に言つた。

「どんな事があつても私を棄てない？」

「無論だよ柳小、お前はお前のお父さんから託されたのだ。私の死ぬまでは決してお前を棄ない」

其の夜は濡やかに眠つた。朝に起て見ると柳小が丁度外から歸つた處であつた。
 「何處へ行つた」

「買物に」

柳小は非常に快活で嬉しさうに頬を染ながら笑つた。

「金は？」

「私のね、伯父さんに頼んだらお金は幾許でも與けると言つて澤山下すつたのよ」
 「お前に伯父さんがあるか」

「えい」と柳小は躊躇して「昨日義州から歸つて來ましたのよ。一日に一返だけ伯父さんの家へ行つて用事をしてやればお金はいくらでも貰へますのよ」

「爾か、其れや可かつた」

柳小は一日唄つたり跳んだりして五郎を笑はせた。而して夕方にふらりと家を出て行つた。彼女の出て行つたのは元の古家の方面である。慣し路とて闇にも平氣である。家の裏手は野面
で其處に例の石を重ねた短い垣がある。其れを跨ぐと奥田の農園である。彼女は其處から跳足
になつた。そして腰を屈めたり立たり人の足背に耳を敲てたりして靜かにくさいて行く。突
然物陰から犬が吠え出した。彼女はびくりと立停まつたが臆て手に持た握飯を投げてやつた。
犬の聲が止んだ。彼女は四邊を見廻して闇に透かして見た。五尺ばかりの高さの一棟の屋根が
見える。建物の中に鶏がごとくと囁き合つて居た。

四

鶏舎の中の宿まり木に、鶏が幾羽となく蹲んで居る。彼等は一日の遊びから疲れて視覚に闇
の幕が降りると、明日の曙光を樂みに胸を膨らし翼を緩く垂れて安らかに眠つて居る。其の一
寸前に死の神が迫つて居るとは什麼して知り得やう。

柳小は靜かに扉を開いた。冷たい風が吹いたので鶏共はかさかさと動いた。途端に柳小の手
が中央の鶏に觸れた。きやつといふ間もなく一本の細い木の枝が口の中に突つ込まれる喉が
塞がつたので聲が出ない。羽搏きしやうにも兩翼が確かと抱かれてある。他の鶏共がくいく
いと鳴き出した。柳小の姿が其の儘闇に消えた。

霎時は恐怖のために夢心地であつた。彼女は賑やかな街の灯を見た時初めて吻と呼吸を吐い
た。町は年の市である。兩側は灯花が春と輝いて屋臺や籠や赤毛布や幾千となき店々の間を幾
千となき人々が往來する何の人を見ても忙がしさう。而して何の人を見ても懐に充分の金を
有つて買物に來たらしく見える十圓の梅の鉢を買つて行く人がある。五十圓の火鉢を買つてゆ
く人がある。風呂敷を一ぱいに膨らして其上に鮓や林檎やを提てゆく女中もある。玩具をうん
とこさと買つてゆく職人もある注連縄や輪飾や檜や蜜柑や品物は飛ぶ様に賣れて行く。
柳小は確と鶏を腋に抱へて此等の賑やかな灯に照られながら歩いた。

「どうして賣らう」
今朝は官吏らしい人が歩いて行くのを呼び止めて買つた。だが今夜は此の幾百千の人

が忙しうに行くのをどうして呼び止める事が出来やう」

「鶏屋へ持つて行かう」

彼女は慙う考へて鶏屋の前へ立つた。鶏屋は非常な忙しさであつた。店の前に十人餘りも客が待つて居た。而して明るい灯の下で若者が鋭利な刃を持つて一塊の肉をすりりと餅でも截る様に細かくするのを見た時悚然として其處を立去つた。立去る時に彼は店頭で吊されてある鶏を見やつた。而して自分の鶏が其れよりも肥つてると思つた。

温かつた鶏は段々に冷たくなつた。而して身體よりも一層嘴と兩脚が冷たい、彼は途方に暮た。

「鶏を買つて下さい、鶏を」と彼女は往來の日本人に聲を掛けた。

「なに？鶏。此方とう鶏に手古摺つてゐるんだよ。借金取つて鳥だ」

其の人はすんく去つた。柳小は二度と人を呼ぶ勇氣が無くなつた。と此時背後から聲を掛けたものがある。

「お前其の鶏を賣るのか」

聲は朝鮮語であつた。振返ると其處に一人の爺さんが蹲んで居る。大黒帽を被つて白い長い髯を垂れて長い煙管から煙を出しながら、「どれ〜お見せ」

爺さんの前に大きな平つたい竹籠があつて、籠の口は繩を網目に張り渡してある。網の間から二羽ばかりの鶏が首を出して居た。

「どれ〜どんな鶏だ」

爺さんははつくと煙を吹いて立上らうともせぬ、其れは其筈だ。爺さんは足を延ばして行火の代りに鶏の中へ突込んで居たのであつた。

「靴が傷んでな」と爺さんは言譯がましく言つて、「おう上等の鶏だ」

慙う言はれた時柳小は鶏の嘴に棒を突込んである事に氣が附いたので、一廻りくるりと廻つて棒を抜いた。

「ブラマの上等〜、私が買はう、幾許に賣るかね」

「いくらでも」

「そら二圓だ」

爺は二圓の金を出して「もつとあるならもつと持つて来てくれ、此の鶏なら五十でも百でも買つてやる」

五

二圓の金は五郎の薬と米を買へば直に消えてしまふ。柳小は又金の工面をせねばならなくなつた。寧ろその事十羽も二十羽も盗んで来やう。怒う考へたもの、彼女は前夜の恐ろしさを憶ふと戦慄せずには居られなかつた。「構はないわ。私のお金だつて日本の人が盗んだのだから」彼女に取つては是が唯一の辯解であつた。彼女は翌夜又もや奥田の農園に忍び込んだ。而して二羽の鶏を抱いて逃げた。例の爺に賣つて四圓の金を懐に家に歸ると五郎は寝もせず待つて居た。

「風が出たから寒からうと思つて心配して居たよ」

「そんなに寒くありませんわ」と柳小は微笑して「臍は痛みませんか」

「いや今日は餘程可い、お前が干菜の御湯に入れてくれたのであれが餘程温まるよ」

「では明日又御湯を沸かしまして」

五郎の傍に蒲團を敷く時自分の身體から鶏の拔毛が二三本散つたので彼女ははつと思つて坐つた。

「どうしたのだ」

「いゝえ一寸躓きましたのよ」

枕に就くや否や夢を見た。其れは幾萬幾億とも知れぬ鶏の毛が雪の如く降り注いで地となく樹木となく家屋となく、凡て眼に見る限のものを埋める。そして一寸二寸と積る中に自分の身體が其の中に柔かく埋もれて行く、膝が動かなくなる胸まで届く、頸筋まで来ると呼吸苦しくなつてもう咽喉元が強くく締め付けられる様、彼女は手を以て其れを掻き拂つた。拂へども拂へども羽毛が積つて来る。彼の兩手も其の眞白な渦巻に捲かれて動かない。彼女は聲を限りに叫んだ。

「おい〜」と五郎は彼女を揺り起した。「魔はれてるよ」

「あ、夢だつたかしらん」

「どんな夢を見た」

「怖い夢」

「大入道でも出て来たか」

「い、え、何だか知らないけれども」

「木登りなんかするからだよ」と五郎は笑つた。

柳小は其れから眠れなかつた。五郎は直ぐに眠つた。病氣の故か首筋が瘦せて、鼻が鋭く、額も骨が張つてる様に見える、蒲團と枕の間から尖がつた肩も見える。

「お瘦せなすつた」と柳小は涙ぐむで凝と其の方を見詰めて居た。

「どうしても早く温泉へ行かなきゃならない」

慫う思ひきめたもの、温泉は愚か、其日の生計にさへ困るのだ。

「一羽盗むも盗賊なら百羽盗むも同じ事だ。あの人は私の牛を盗んだ人達だ」

又しても立派な辯解が頭に浮んで来る。彼女は如何にして澤山の鶏を盗み出さうかに就て種々と考へた。うとくととなつたかと思ふと夜が明けた。起きて見ると一面の雪である。雪の

上を朝日がきらりと照らして居た。彼女は例の如く食事の支度を済してから竊と家を出た。路は未だ凍ほつて居たが、途中からじめくと溶け出した。彼女は直ぐ跣足になつた。耳が寒いので小風呂敷で頬冠をした。農園へ行て見ると誰も島に出て居るものがない。藪の蔭で焚火をして居るのは大工共らしい。煙がめらめらと雪の上を這うて消えてゆく。天は淺黄天の晴れ晴れとした色をして居た。ふわくと白い雪が稀に飛んだ。雪に照り返す光は家屋や樹木を明るくした。枯草の路を辿つてゆくと池がある。池は凍つて、氷の上の片隅に雪が吹き溜まつて居るが、片隅の日の當る處は水の皺ほどの薄氷で其處に鶯鳥が五六羽黄色な嘴を並べて日向ぼかりをして居た。

六

池に添いて廻ると高梁を束ねて山の如く積んだ處がある、束の上方には雪が掩さつて其れが湯氣を立て、溶けながら瀧の如く滴つて居た。束の根元には僅かに青い下萌らしい草の根が露はれて春待ち顔に思はれた。其處に無数の鶯が遊んで居た。ブラマやミノルカや名古屋コーチ

ンや其等が雪解の中を嘴で突いては泥を浴びたり、又た忙しい最中に立ちながら眠つて居たり、遠く離れては又た團樂の方へ立戻つたり、頭を擧げて四方を警戒したりして居た。柳小は高粱の蔭から針に飯粒を付けた糸を抛け出した。

「こゝゝゝ」と鶏がやつて来る。飯粒を嘴に啄んでぐつと呑む、途端に糸が引かれる。鶏は聲を立てる事も出来ず糸のまゝに歩き寄る。柳小は其れを抱へて翼の下にくつと頸を折る、而して其れを高粱の束の中に隠した。

一羽二羽三羽、瞬く間に十数羽の鶏を束の中に入れた。

「もつと上等がないだらうか」

彼女は先刻池の畔で鷺鳥が遊んで居た事を思ひ出した。で彼女は直に池の畔へ出た。鷺鳥は瘤のある頸を伸ばしたり縮めたりして居た。彼は人を見ると鳴く癖がある。そこで柳小は物蔭から餌針を投げた。大きな鷺鳥は眞先に走り寄つた。一口に啄ばんだが喉に針が掛つたのでぎやあと鳴き出しながら羽ばたきした。一羽が不穩の状態なので他の五六羽が一度に鳴き出した。鶏と異つて鷺鳥は喉が太い、一本の針が引掛つた位では平氣に聲を出さず事が出来るのだ。

「があゝぎやあゝ」

柳小は驚いて糸を捨て、逃げやうとする途端に大きな手が其の首筋に掛つた。

「鶏泥棒！」

二三人が走つて来た。

「何だ女だね」

「この阿魔だよ、昨日鶏を盗んで行くのは」

柳小は御免なさいとも何とも言はずに親念して人々の爲すが儘に任せた。彼女は今まで父と共にどれだけ日本人のために擲られたか知れない。擲らだけ擲つたら止すだらうと彼女は思つた。これが彼女の経験から出た考へである。彼女は父と共に縛られて其の顔が眞黒になるまで煙で燻された事がある。その時でさへ彼女は泣かなかつた。朝鮮人には二種類ある。一つは拳骨を振り上げて「哀號／＼」と泣き出すもので、今一つは首が飛んでも泣かぬ種類である。前者は支那種に屬し後者は漂流のクラブ族に屬すと傳へられて居る。柳小は後者である。強情で我慢強くて復讐心が強い。彼女は毎も撲られながら今に見ろ何かで復讐してやるからと考へ

るのであつた。

「此奴中々圖太い女だ。ふん縛つて寒曝しにしてやれ」と人々は罵しつた。

「惜いものだ。おい番茶も出花つて年頃だよ」と言ふものがある。

「馬鹿野郎、女と見ればこれだ」と一人が笑つた。此時誰か、高粱の中に鶏の屍が十數羽あるのを發見した。

「大變だ、此の通りだよ」

一同の憎しみが更に募つた。柳小はぐるぐりに縛られてどさりと高粱に積つた雪の上に倒された。

「瀧川さんに報らせろ」と一人が叫ぶ、他の一人が走つて去た。残る二人は張番のために焚火をして暖たつて居た。柳小は總身の痛さを怵へて雪の上に坐つて居た。どうとも勝手にしろといふ覺悟は彼等が口汚なく罵しる度に益々固くなつた。だが彼女は只た一つの事を考へた。彼女は巾着を持つて居る。巾着の中には未だ三圓ばかり残つて居る。

「先生の手許には一文もないのだから、私が殺されてしまふと誰も先生へ届けてくれる人がな

い

七

五郎の事を思ひ出したので柳小は急に悲しくなつた。

「私が居なかつたら誰が先生の看病をしやう、誰が御飯を焚いてあげやう」

生きて居るのは我がためではなく先生のためなのだ。父に別れ家を賣つて村の人達には侮られ行くにも居るにも處のない身分となつても先生の傍に居ればこそ安らかに眠る事も出来るのだ。

「先生もどんなに御心配なさるだらう」

「何ぞ思ふと悲しさが一ぱいになつて柳小はしくしく泣き出した。

「可愛さうに女の子ぢやないか縛らなくても可いよ」と先刻の眼尻の下つた男が言つた。

「のろまだね、女だつて男だつて泥棒は泥棒だよ」

「だが見ねえな未だ十六か十七だぜ、お前なんか……に行きや此の子より見つともない奴でも……ぢやねえか」

「何を言てるんでえ、手前は女を見さへすりや涎を流すんだね」

「お前だつて同じだよ。おい一昨夜の奴はどうだ。四十三で婆あに鼻毛を延ばしてさ箸で揃んで刺身を食はすなんざ餘り好い形でないぜ」

「馬鹿を言ふな、お前そんな事俺の娘の前で云ふと困るぜ」

「そら其れを見ろ、お前の娘だつてもう十六だ。娘が十六になるに女郎買も無えもんだよ。えいおい、十六と言へば此の子も丁度お前の娘と同じ年頃だ。夜中に酒を買ひにやるのでさへお前はお花寒いから風邪を引かねえ様に俺の半天でも引掛けて行きねえよと勅はつてやるぢやねえか。えいおい、此の子だつて親があるだらう。親の身になつたら什麼なものだへ、お前の娘と同じ年頃だぜ、雪の上に縛られて倒れてるんだぜ」

「いやに肩を持つな、手馴けてものにしやうといふのかへ」

「だが、お前にも娘があれば、……たしかお花坊は病身だつたけな」



「おいもう娘の話は止してくれよ」

「だからさ、繩だけ解いてやんねえよ。親が長の病で藥代も無えから雞を盗みに來たのかも知れねえ。爾すると此の子は親孝行といふものだ。貧の盗みで狎の握飯と間違へだつて落話にあらあな」

「逃げなければ可いが……」

「男が二人従いて逃がす事があるもんか、さあお花坊ほどいてやるから暖たれよ」

「おい此の子はお花坊といふのか」

「お花坊はお前の娘だ」

「俺の娘と泥棒と一緒にする奴があるもんか」

「名前が解らねえから一寸貸しておくれよ」

男は歩き寄つて柳小の繩を解いた。柳小は嬉しさうな顔もせず坐つて居る。

「此方へ來なよ、おう冷てえ手をしてるな」

「そろ／＼出齒公を始めやがつたな」

「さあ、悪かつたら謝まるが可い、小父さんが御わびをしてやるからな。えいおい、親が病氣で筍を掘りに來たんだらう」

「筍ぢやないよ」

「あ、寒中に鯉を取りに來たんだね。鯉が居ないから鶯鳥で埋合せをしやうと……さあ暖たれ暖たれ」

再び手を取ろうとすると振拂つて柳小は一目散に逃げ出した。

「そら逃けた」

「おうい泥棒／＼」

二人は一生懸命に追ひ掛けた。

八

逃げは逃げたもの、方角を決めなかつた。柳小は只だ足に任せて走つた。土藏や物置や荷くも目を遮るものがあれば其れを利用して姿を晦ました。背後は段々騒々しくなつた。追手の數が加はつたのであらう。柳小は此の農園の地理を精しく知つて居る。併し此の春此の土地を出た後で、いろ／＼な建物が増加され、隣の方に立派な邸宅が建てられた事は毫も知らなかつた。突然として廊下があるかと思へば又突然西洋館がある、温室もある。彼女は戸惑ひしながら廊下を横ぎつて外へ出ると背後から人々の聲が聞える。

「右だ／＼」

「左だ／＼」

聲が段々に近づく、柳小は行手には洋館が立塞がつて何處も逃げ場所のない事を知つた。雪解の脚は膝まで泥に埋もれて倒れた時に兩手と片頬も泥だらけになつた。青い上衣は破れて何かに引搔かれたのか襯衣まで一文字に裂かれ、其處から若い肉の色が覗いて居る。追ひ來るも

のは倔強の男共で、追はるゝものは十六の娘である。彼女は呼吸が段々苦しくなつた。而して眼がぐるぐると廻る様に思はれた。日本人が如何に自分達を虐待するかを見聞して居る彼女は捕まへられたら最後である事を知つて居る。彼女は殆んど氣狂はしく動いた。其れは全く動いてゐるだけである。もう萬事が終りである事を知りつゝ、も片時も動かすには居られない。と見ると其處に露臺風の突出た處があつた。一枚の板が横合から剥かれて風のためにぱくりと動いて居た。彼女は殆んど本能的に其處へもぐり込んだ。其れは床の下である。黒暗々たる穴の中に身を入れると冷たさが更にぞつと迫つて来る。彼女は野獸の如く腹這つて靜かに耳を敏てた。人々の聲が段々に遠くなつた。彼女は吻と呼吸を吐いた。此の時寒さと疲れが總身を襲ふた。胸は早鐘の様に動悸して居るが、眼ばかりは絶えず穴の外に動いた。と段々と身體が柔かくなつて、うと／＼と眠りに引込まれる。

「眠つちや不可い」と彼女は思つた。此の儘眠ると死んでしまふと思つたのである。外の方は日がきら／＼と輝いて、風がひゆう／＼と吹いて居る。彼女は機を見てもう一度外へ飛び出さねばならぬと考へた。突然人々の足音がした。

「此邊だ／＼」

「いやもう少し前だ」

人々は二た手に別れて搜索して居るらしい。彼女は次第／＼に暗い方へと這ひ込んだ。そして黙つて眼を閉ぢた。もう死ぬのだ。此の儘凍て死んでも日本人の手に掛つて死にたくはない。彼女の頭が次第に朦朧になつて手も足も懈くなつた。彼女は老たる父を思ひ浮べた。同時に片手を動かす事が出来ずに手づから飯を炊いてる五郎の姿も見た。父も先生も不幸な人だ。慙う思ふと涙がだら／＼と流れた。そして其の儘引込まれる様にうとうと、なつた。

突然奇妙な響が頭の上にとつた。其れは微に咽ぶが如き聲と訴ふるが如き聲と又潮の如き緩やかな聲との綜合であつた。聲は瞬く間に變つてゆく、流れては春の雲が影を緑の野に映して緩く遊ぶかの様、駛つては村雨の梢を過ぎて下草の葉末に訪るゝ様、何とも言へぬ微妙な音調は高低縦擒に舒びつ縮みつする柳小ははつと眼覺めて耳を敏てた。音楽ははたと止んだ。と又續く。

「二日経てもニナは歸らず…眼覺めよやニナ…」

咽び泣きに泣くが如き女の聲が聞えた。

「あゝ〜」と柳小は両手を顔に當て、泣いた。

九

「何といふ悲しさうな聲だらう」

柳小は涙を流しながら更に聞き入った。穴の中は眞暗である。其の頭の上の音楽は暗い空気を顔はして外の嵐も日の光もありとあらゆるものを悲しい優しい懐かしい涙の中に溶してゆく。

生死の境にある柳小も此の哀調の中に霎時吾を忘れた。だが其れは一刹那で彼女はどうしても生きて行きたいといふ慾望が俄に湧いて來た。外には人の氣勢もない。彼女はそろ〜と這ひ出した。板の間から見ると人の影もない。彼女はそろ〜と穴から出た。そして起き上らうとする途端に人の聲が聞へた。

「居たよ〜」

「此處だ〜」

彼女は再び引込む間もなく二三人が驅けて來た。もう逃げる事も出来ない。彼女は最早やこれまでと覺悟を決めたが、此の時の彼女の眼に窓が一つ開いてあるのを見た。窓の中には人が居るらしい事も解つた。だが彼女は身を跳らして高い窓の端に手を掛けた。木登りに妙を得て居る彼女はする〜と猿の如く攀ぢ登つた。そしてひらりと窓から室内に跳り込んだ。同時に

「あら」と叫んだものがある。それは柳小に聞へなかつた。

「助けて下さい〜」と彼女は朝鮮語で言つた。そして自分の前に立つて居る女の裾ばかりを見やつて日本の女だと知つたので日本語で、

「助けて下さい」と言ひ直した。

「どうしたの？」といふ優しい美しい聲が聞へた。「まあ可愛さうに」

柳小は恐る〜顔を上げた。何とも言へぬ美しく若い婦人が黒眼勝の眼に憐れみの露を流

へて凝と自分を見詰めて居る。

「私は雞を盗みました。見付かつたので私を殺さうとするんです。日本の人は私のお金を盗

「だから私が鶏を盗んでも可いと思ひました。農園の人達は私を殺します。私は死ぬのはいやです」

「農園の鶏を盗んだの」

「はい」

「鶏を盗んだからつて、人を殺す道理がありません」

美人は眉を擡めてピアノの蓋をしめ、

「安心なさい、私が可い様にしてあげるから」

「有難うございます」

「憚う言つた時柳小は何處かで見た事のある人だと思つた。彼女は立派な絨氈の上に坐つて自分の足で泥塗れにした痕を面目なさうに手で以て拭き初めた。

「可いよくそんな事をしなくても可いからね。大分疲れてる様だから此處へ御寢み、安心してお寢みよ、私が従いてるから」

強て柳小を寢椅子の上に寢さして毛布を掛けてやり、頭や顔の泥を手拭で拭いてやりながら、

「併しどんな事があつても人のものを盗んぢや不可ませんよ」

「はい」

「お前は御父さんがあるの？」

「はい」

「御父さんに御心配を掛けると濟まないぢやないの？御母さんは？」

「ありません」

「男手一つなんだね」

「父は此處には居りません」

「ではお前一人なの？」

「い、え二人です」

「兄さんか姉さん？」

「い、え」

「その人の處へお前を届けなきやならないが、此の家へ来て貰ひませうか」

「其れは不可せん」

「どうして？」

柳小は何か言はうとした時、扉を叩く音がした。

「誰方？」と美人は言た。

「私です」といふ聲は事務員の瀧田である。

「何か御用？」

「はい、入つても宜しうございますか」

「不可せん」と美人はきつぱりと言た。

「鶏を盗んだ女が御室へ逃げ込みましたので」

「そんなものは居ませんよ」

「いや確かに」

「居ないと言たら可いぢやないの？」

「併し」と言ひかけた時扉が開いた。

「何故開けるのです」と美人は窘める様に言た。

美人は晶子である。彼女の聲が餘りに鋭かつたので瀧田はぎくりと入口に立ち柳小をちらと見やつて、

「此處に逃げ込んだな」と咬いた。

「私の室へ何故入るので？」と晶子は顔を赭くして言た。

「此女が鶏を盗みましたので」

「何を言ふの？」と晶子は怒つて、「此の方が什麼したと言ふの？」

「鶏を盗みましたんで」

「泥棒だといふの？」

「爾です」

「そんな事はありません」

「いや確かに」

「い、え、決して」

「では何故貴方の御室へ逃げ込んだのでせう」

瀧田は詰責する様に言った。

「此の子は私の友達です」

晶子は屹と言放つた。

「御友達？」と瀧田は大袈裟に驚いて、「冗談を仰有つちや困ります」

「私の友達が私の室に居るのに何の不思議がありませんか」

「爾ですか」と瀧田は思ひ返した様に言て、「では失禮しました。私は監督の責任上から兎に角

警察へ行って参ります」

「警察へ行って什麼なさらうと言ふの？」

「犯人は探して貰ひます。私ばかりでなく皆が認められた犯人を捕縛して貰ひます」

「それは貴方の御随意です。私は私の友達に侮辱を加へる様な邸は直ぐ出て行ってしまひますか

ら奥田さんに爾言て下さい」

「併し夫れは御嬢様」

「彼方へ御出なさい」と晶子は煩ささうに叫んだ。瀧田は何か言ひさうにしたが直ぐ両手を振

て出て行た。

瀧田の背後を見送つた晶子は扉にきちんと鍵を入れて椅子に立戻つた。柳小は事の成行どう

あらうかと呼吸を殺して見て居たが、此の時涙が止め度なく流れた。

「心配をおしでないよ」と晶子は傍に寄つて、「私が付いてるからね。さあ御茶を御飲り、お腹

が空いてるだらうから何か」と霎時考へたが臆て嬌然して立上つて、紫檀の棚の上から綺麗な

菓子鉢を取り出した。

「さあ此のカステーラは東京のだから美味しいのよ。さあお食いなさい。そして疲れが息まるま

で緩くり眠ると可いわ」

「有難うございます」と柳小は勿體なささと嬉しさが一度に昂みあけて泣きながら言つた。

「遠慮しちやいやよ。可いかへ、これからは決して人のものを盗んだりなんかさせない様にね、

私も御友達が無いんだからちよいちよい遊びに御出、鶏の事は私から能く言つて置くから氣に
しなくても可いよ」

「はい、有難うございます」

「さあ御菓子を澤山お食べ、そして御眠み、どれもつと暖かくしてあげませう」

暖爐に石炭を燻べやうと立上る袖を惹き止めて柳小は言た。

「もう結構でございます、お嬢様」

晶子は此時黙つて柳小の顔を見詰めた。而して手に持た火箸をばたりと床に落した。

「お前は どうして そんなに 日本語が上手なの？」

「はい、私お稽古をしましたから」

「お前は日本人の家に居るんだらう」

「はい」

「その日本人は何といふの？」

「はい、それは……」

柳小は世を忍ぶ五郎の事を他人に漏らすべきでないと思つて口を噤んで晶子の顔を凝と見上げた時に突然驚きの聲を放した。

「貴方は曾日御目に掛つた方ですわね」

「爾！私も思ひ出した。牡丹臺で？」

「はい牡丹臺で」

「五郎さんは什麼なすつて？」

晶子は寢臺に走り寄つた。

一一

夕暮の薄闇にほんの一瞬間顔を見たきりの二人は此室で逢つても急に思ひ出せなかつたのは無理のない事である。いよくあの時の娘だと解れば聞きたい事が山々である。晶子は急しく問ひ寄つた。

「五郎さんは什麼なすつて？五郎さん？」

「五郎さん？」と柳小は不思議さうに眼を張つて、「では異ひますわ、私の先生は……」

「あ、秋山武雄といふのだらう」

「えい、爾です」

「それは五郎さんの事です」と晶子は微笑して轟く胸を制する様に片手を當て、「怪我をなすつて居たのね」

「はい」

「もう快いの？」

「い、え」

柳小は五郎の傷を思ひ出したので急に悲しくなつて涙ぐむだ。

「悪いの？、どんな風に悪いの？」

「悪くありませんけれども、寒い時に痛みますの」

「ぢや未だすつかり快くないのね、御醫者さんは？」

「醫者には掛りません」

「どうして？」

「どうして、御嬢様」

柳小の眼は涙に濡れた。

「お金が無いの？」

「はい」

「あ、爾？」と晶子も無然として黙つた。何に不自由なき自分の境遇に比べて、異郷の空に放浪して人目を忍びながら醫藥の代にも困つてるとは何といふ惨めな運命であらう。晶子も同じく涙を一ぱいに湛めて、「私は氣が付かなかつたわ」

「お金があれば温泉へ行つて癒したいのですけれども、私のお金は盗まれてしまつたもんですから」

「其れで毎日どうして生計して行てるの？」

「それはねお嬢様……」

柳小は此まで言たがもう堪らなくなつて急に歎けりあけた。

「あゝ、く」と晶子は歎息して、

「解りました。其でお前が鶏を盗みに来たのだわね。五郎さんを養つてあけるために」

柳小は両手を顔に當てた。

「勘忍して頂戴」と晶子は柳小の泥まみれの首筋を我が胸に抱き寄せて泣いた。

「お前にばかり苦勞をさして濟まなかつた。堪忍してね、ねえ五郎さんもどんなに私を恨んでるだらう。ねえ、今日からは決してそんな苦勞をさせないからね、……五郎さんは私の事を何とか言つて、り？」

「い、え」と柳小は晶子の胸を離れて言つた。

「いつか牡丹臺で逢つた時大變に怒つていらつしたが」

「い、え何とも仰有つて居りません」

「でも私の噂をする事があつて？」

「い、え何んにも」

「何んにも？」と晶子は失望して、「なんにも言はないの？」

「はい」

「私といふ妹があるといふ事も？」

「貴方は先生の妹さんで被居やるの？」と柳小は不思議さうに言つた。

「えい、私はね、妹の晶子といふのよ」

「晶子さん。あゝ、晶子さん、爾言へば先生が折々仰有います」

「どんな事を」

「私を呼びなされる時に、晶さんくと言て直に又た間違つたね、と仰有つて笑ふ事があります」

「其れだけなの？」

「はい」

「憚う言た時二人はちらりと眼と眼を合はした。

二人の話は盡きなかつた。晶子は五郎の様子を一つくんに訊ねた。例令ば朝に起きてから何

をしてどんな食事をして夜は何時頃に寝て、讀書をするか、來客があるか、散步をするか、氣が短いから世話に困る事があるだらう。着物や洗濯ものはどうするか。是等の質問が次から次へと移る。而して爆彈當時の模様を訊ね出した。柳小は答へやうとして又た躊躇した。

「可いのよ、私は妹だから」

柳小は安心して當時の事を物語つた。聞く事毎に晶子は驚きつ悲しみつ又た喜びつした。

「でも牛命が助かつて可かつたわね。で兄さんは其の團體の仲間であつたの？」

「其れは私に解りませんが、多分爾なんぞせう。朝鮮に居る日本人に碌なものはない。だからどうしても眼を覺まさせなきやならないと毎も仰有つて居ますから」

晶子は嘆息した。朝鮮人の血を享けた五郎さんが、自分の同胞が悲惨な境遇にあるのを見たら憤慨なさるのは無理でない。のみならず多血性の兄さんの事だから、過激な手段を取らうとしたのかも知れない。若し爾とすれば兄さんは愈々逆徒の一味として其筋から探察されてるに違ない。其の秘密を握つて居るのは奥田だ。怒うなつて來ると自分も什麼しても奥田の妻にならなければなるまい」

晶子は凝と其の事を考へ續けた。彼女の顔は時に赭くなり時に青くなりした。而して吃と唇を結んだ。

「十一月の三日に結婚する約束だつたのが病氣と稱して今まで延び／＼にした。いつまで此の儘に居るべきでない。結婚を済まして秘密の證據品を取り上げ其の上で御父様に謝願して見さんを恕して貰ふ事にしやう」

彼女が怒う考へてる間に柳小は又別な事を考へて居た。

「先生が待て居らつしやるだらう。早く歸りたい。だが此の美しい方が本當に先生の妹さんか知ら、若しや奥様か何かで無いかしら。若し奥様だつたら私は什麼しやう。いや／＼此の方は決して嘘を仰有やる様な方ではない。先生も曾白妹さんがあつて東京とか大阪に被居ると仰有つた。本當の妹さんに違ひない」

怒う思つた時突然彼女の唇から聲が漏れた。

「御嬢様、貴方は何故先生を訪ねて被來やらないの？」

「あ、」と晶子は冥想がら覺めて答た。「それはね、行きたくも行けないの」

「どうして？」

「私か此の家から一足も外へ出られないんですもの。若し出て行くと必ず人が従いて来るから兄さんの家が解るでせう、爾すると警察がね」

「あ、そのためですか」と柳小も歎息して、「では御嬢様、御手紙を御書き下されば私が持つて参りますわ」

「でも若し誰かに捕まると……」

「大丈夫です、私は襦衣の裾に縫ひ込んで行きますから」

晶子も霎時考へて其れから卓子に向つてペンを取り上げた。一行書いては歎息し二行書いては涙を拭き、時にはペンを持つたまゝ、顫へる事もあつた。柳小は凝と其れを見詰めて居た。

「何といふ美しい方だらう」

荒い大島の着物の對の羽織を着て特に目立つた處はないが、色がくつきりと白いので柔かい首筋と顫が半襟に埋まつて見える。半襟は此の人の好みと見えて無地の紺紫縞子に模様も刺繍も何もない、其れがいかにも上品に優しく思はれた。

「こんな綺麗な方がこんな立派なお邸に居らつしやる。而も其れが先生の妹さんだ。其れはお二人が一緒に御話しなさる事も出来ないとは何といふ惨たらしい事だらう。たつた一べんでも可いから先生と會はしてあげたい」

一三

手紙を書き終つた晶子は筆を擱て靜かに歎息した。

「これを持つて行つて頂戴ね」

柳小は手紙を手にして片隅に立た。而して體裁悪さうに上衣を脱ぐと、縦ぎ矩だらけの肌着が現はれた。

「あ、ちよいとお待ち」と晶子は呼び止めて次の室へ走つたが直ぐ一襲の着物を持つて來た。

「これをお前に呈けるからね。平常着に來て御出、悪くなつたら又いくらでも呈けるよ」

水玉模様の紫地のお召に同じ色の飛び緋の羽織やら、緋羽二重の長襦袢やら、糸錦の帶やら下紐やら木綿の肌襦袢、禪まで取揃へて晶子は柳小の前に出した。

「これを？」と柳小は嬉しさと驚きとに肝を潰して晶子を見上げた。

「あ、兄さんが御世話になつた御禮と言ふのも變だけれども、私の志だからね」

「でも私……」

「可いから取つてお置きよ。其れからね、これは銀行の切手だから五百圓だけね、銀行へ行つて受取つて何でも兄さんの不自由のない様にして頂戴。なくなつたら又呈けますわ」

「お金は頂戴しますが、此の着物は……」

「可い、よ、さあこれを着て御出」

「では御嬢様」と柳小は嬉しさに何も言へなくなつてびよこびよこ頭を下けながら着物や長襦袢を折り返し、眺めて居た。

「さあ私が着せてあげませう」

「でもお嬢様、此のお室を出る時に……」

「あ、爾うだつたね、着物は着ても履物がなし……」

「此の儘で参りますわ、跣足の儘で」

外を見ると雪がしきりなしに降つて居る。

「丁度可うございますわ」

「あ、其れではね、こんなものを持つて行くと兄さんが怒るかも知れませんが、其れは手紙に書いてあるから、そしてお前と路で逢つて私がお前を能く知つて居たから家へ連れて来た様に書いたから其の積でね」

柳小は針と糸とを借りて手紙を襦袢の襟に縫ひ込んだ。

「では御嬢様」

「若し用があつたら此の窓を三つ叩いておくれ」

「はい」

「不自由な事があつたら何時でも来ておくれ、兄さんの事はよろしく頼むよ」

「はい」

「何處から行くの？」

「矢張り窓から」

「ではね、私の古いマントを呈げるから着てお出」
 紺羅紗のマントを着て柳小は窓側に立た。雪は颯と室内に吹込んだ。庭の木々も建物の屋根も早一尺餘りも積つて居る。降りしきる雪は恰ら綿をちぎつて抛けた様、一寸先は白一白のために見え解ぬ。

「左様なら」と柳小は小聲で言つた。そしてするくくと窓から降りた。
 「大丈夫かへ」

「はい」

窓から飛降ると脛は膝の處まで雪に埋もれた。
 「可愛さうに」と晶子は下を見下ろしながら言つた。下へ降た柳小は凝と上を見上げた。而して一禮した。

風呂敷包を負ふた上に着たマントの脊中が膨れて圓々とした形のもものが雪の上を走つた。晶子は手を額にしていつまでも見送つた。雪は其の髪に額に冷たく掛つた。
 「よろしくね、兄さんの事を頼むよ」と晶子は猶ほも口の中で繰返した。

一四

降りしきる雪を跣足に踏んで柳小は一生懸命に走つた。今朝からの種々の事のために彼女は疲れきつて居た。併し彼女の心は嬉しさに跳つた。彼女は町を出るや否や、人なきを幸に立ち停まつて風呂敷包を背中から下ろした。而して風呂敷の間から燃ゆる緋羽二重の長襦袢や糸錦の帯などを一寸睨めて微笑んだ。

「五百圓！これだけのお金があれば明日からでも先生を湯治にやる事が出来る。先生が癒るとすると一緒に上海でも間島でも御供してのんきに暮す、そしてあの晶子さんをも是非伴れて行く、あんな美しい方に私が妹と言はれる様になつたらどんなに嬉しいだらう」
 彼女はさつと顔を赧めて再び風呂敷包を負ふた。立派な着物と五百圓の金が自分の身體に着いて居ると思へばもう氣が徐ろに浮立て走りながらも考へる事は其ればかりである。

「私は日本の着物を着るとどんな風だらう。長い錦の帯を締めたら身體が重くて歩くに不便ではあるまいか、兎も角第一に着もの、着やうを先生に教はらなきやならない。着物は着れても

日本の人が穿く下駄といふものは私に穿けまい。そうすると困つてしまふわ。イヤ草履なら穿けるかも知らん。仕方がなければ靴を穿いても可い。日本の着物を着れば私はもう木登りなんかしない。晶子さんの様に大人になつて澄まして居るんだ。外を歩いてても日本の人達でも私を日本の御嬢様だと思ふだらう。萬一したら先生の奥様だど……いや私は未だ子供に見えるか知らん」

嬉しいにつけ心配も起る。彼女はさまざまな空想を描いて獨り笑ひ獨り顔を根らめた。程なく家の軒が見える。彼女はこうして此の喜びを表はさうかと考へた。何か恚う先生を驚愕さして後で喜ばしてあげたいとも思つた。其の考へが纏まらない中に彼女はもう家へ入つた。

「柳小か」といふ聲は五郎である。

「はい只今」

「晩かつたね」

「えい、御腹が空いて？」

「いや雪が降つたからね」と言ひかけて五郎は裏口へ出た。背中を圓くしてマントを着て膝か

ら下を眞赤にして立て居る柳小の姿を見て彼は驚いた。

「どうしたんだ」

「可いのよ、私嬉しいんです」と柳小は雪の上を二つ三つ踊つた。

「小父さんの處へ行なのかへ」

「えい、もつと可い處へ、あら先生寒いわ」

木戸を閉めて五郎を奥へ引返してから彼女は小唄を口吟みながら足を洗ひ初めた。

「寒かつたらう」と五郎が聲をかける。

「い、え暖かつたわ」と柳小が足を拭いた時に一二箇所引掻傷のあるのに氣が付た、で彼女は直ぐに袴を下してマントを着たまゝ奥へ入つた。五郎は手焙に手を翳しながら微笑して居る。

「あいよ、あいよ、あいよ……」

可笑しな節で唄ひながら柳小は一二度室内をぐるぐる廻りながらマントを脱ぐと風呂敷包が現はれる。彼女はどしんと坐つて包を五郎の前に置いた。

「何だこれは」

五郎も笑ひながら包を解いた。

「あゝこれは什麼したのだ」と五郎は着物や帯を見て叫んだ。

「あいよ〜あいよ〜あいよ」と柳小は再び起つて室をぐるぐる廻つた。

「おいどうしたのだよ」

柳小は答ずに手探りに自分の肌着の襟を破つて先づ五百圓の小切手を出し其れを五郎の膝の上へにふわりと置いて又た踊り出した。

「あいよ〜あいよ〜あいよ」

五郎は小切手を一目見るや否やおつと叫んだ。

「お前は誰にこんなものを貰つた」

「語気が鋭かつた。」

「あいよ〜あいよ〜あいよ」

「こらッお前は誰に貰つた。馬鹿ッ」

踊り廻つた柳小は吃驚して足を停めた。

一五

五郎の権幕が餘りに烈しかったので柳小は黙つて其の顔を見やつた。

「不可せんのか？」

「これは奥田富男といふ名前になつて居る。これは何だ。あんな奴から什麼して金を貰つて来たのだ」

「あのね、其れは途中で逢つたもんですから」

「奥田に逢つたのか、あんな奴をお前はどつして知てるッ」

「いゝえお嬢様に、貴方のお妹さんに」

「妹に？ 晶子に？」

「えい、先方で私を知つていらしつて一寸来いと仰有つたもんですから」

「お前行つたのかへ」

「えい」

「何處へ？」

「お邸は農園の中でした。今度新しく建ちました」
「行つてどうした」

「こんなものを下さいました」

「本當か柳小」と五郎は屹と言つた。

「えい本當です」

「柳小！」と五郎は幾分の怒氣と涙を含んで言つた。「お前は金が欲しからう。着物が着たから

う。併しこれは貰ふ事が出来ない。御苦勞だが直ぐ持つて行つて返して来い。大島五郎は乞食でない。人畜生からものを貰ふ位なら舌を嚙むで死んでしまふと言つて来い」

「なぜでございます」と柳小は先刻の喜びもいつしか消えて悄然として言つた。

「彼奴等は人間でないのだ」
「い、え晶子さんは立派な方です。お美しくくて情があつて、私を助けて……」と言ひさして

はつと口を嚙む。

「もう言ふな。直行つて来い、返して来い。柳小、僕が身體が不自由でお前にばかり苦勞をさせて置くから此那乞食扱ひをされるんだ。今日から僕は働く、船積の仲仕人足でも兼二浦の坑夫にでも何でもなる。行け、早く此んなものを返して来い」

「ですけれども先生」と柳小は恐るゝ顔を覗いて、「其れは此のお手紙を御覽になつてからにして下さい」

顛へながら差出す一通の手紙を五郎はちらりと見やつて又た叫んだ。

「こんなものを見る必要がないから、封のまゝ、是れも返して来い」

「先生！」と柳小は蒼白になつて一生懸命に言つた。「先生はたつた一人の妹さんを何とも思つて被居やらないの？」

「そんな事は貴様の知た事か」

「妹さんはどんなに先生の事を思つて被居やるか知れませんが。私を捕へて先生の起きなさる時間から御寢みになるまでの事やら、御食事の事やら、御病氣の事やら何から何まで細かく御

訊きになつて此の手紙をお書きなさる中に何返御泣きになつたか知れやしません。先生が何を其那に怒つて被居やるのか解らないけれども此の御手紙を御覽になると屹度お解りになるでせう。其れを封も切らずに返してしまへなんて仰有やつても私は返しに行かれませぬ。先生にも御恩があれば、晶子さんにも御恩がありますもの、私はそんなお使に行ぐ事に厭ですわ。一返御手紙を御覽の上で其れでも行けど仰有るなら私は雪が降つても雨が降つても又た参ります。此の儘では餘り可愛さうでございます」

足らはぬ言葉で泣きながら言ひ立てた柳小の顔に眞實の色が動いて居た。五郎は何も答へずに苦りきつて居る。柳小は涙を拭きくく臺所へ去つた。あとに緋羽二重の長襦袢が風呂敷から零れて居る。

一六

柳小の去つた後で五郎は獨り唇を噛みしめて居た。眼前にある晶子の手紙、表書には只「兄上様」としてある。見覚えのある鶯堂流の手蹟である。

「何をく何が兄上様だ。榮華利慾に眼が昏れて肉を切り賣する女に兄と呼ばれる自分ではないぞ。兄上とは何だ。畜生の兄なら矢張り畜生だ。俺は畜生でないぞ」

五郎は脳天が怒氣に痺れる様な氣がした。

「畜生くく」と彼は叫んだ。牡丹臺で富男と二人で睦しく語つて居た光景がありくと眼に浮ぶ、同時に富男に洋杖で打たれ辱められた口惜さが一度に昂みあけて来る。彼は手紙をむつと攫んだ。そして一と振り兩手で振つたが手紙は手拭の如く絞られたまゝ、裂けない裂けないのは益々癪に障つた。彼は其れを疊に抛りつけた。奇妙な形をした手紙は逆立ちの様に横に突立った。其れが又恰ら彼を擲擄つてる様に思はれた。彼は再び取上げた。

「手紙といふものは人間が文字を書くんだ。畜生が字を書くのと文字の汚れだぞ」

何かしらんあらゆる穢ない言葉を並べて罵倒しなければ腹が癒えない様な氣がした。彼は前回に懲て今度は手紙を豎に持ち直した。而して皺を伸ばして一息に引裂かうと思つた。

と見ると兄上様と書いた下に小さき妹よりと書いてある。

「小さき妹！」と彼は不圖眼に止めた。ほんの一刹那である。小さき妹！、彼の頭に閃いた

ものは戀人の品子でなくて、リボンを下髪に結んで銘仙の肩揚深く、紫紺の袴を穿いた小さき妹であつた。小さき妹！此の呼び名は十七八や十九位までも用ゐられた。手紙の端には必ず小さき妹と書いた。

何とも言へぬ揆つたい心持が憤怒の絶頂に水を注いで逆轉した。逆轉は非常の速度を以て行はれた。今の晶子と小さき妹とは全く別個の人間であつて、本當の小さき妹は別に何處かに居る様な氣がした。

「見るだけは見てやらう」と彼は獨りで言た。そして封を切り出した。

「御飯が出来ました」と柳小は聲をかけながら出て來た。

「もう少し待て」

「あら」と柳小は言つた。「御覽になるの？」

「お前の知つた事か」と五郎は弱點を突かれた忌々しさに怒鳴つた。柳小は黙つて其處を去つた。其れは如何にも自分の勝利を矜るもの、如く、

「それ御覽なさい」と言ふ風であつた。

五郎は四つに折つたペーパーを延ばして讀み下した。

「御兄さま、私が此の手紙を書いて貴方に差上げてても貴方は御讀みにならないかも知れませぬ。併し此の手紙は貴方の小さき妹が一生に一度の……只だ一度の手紙だと思つて御讀み下さい」

五郎は首肯して讀み續けた。

「お兄さま、私は貴方に申上けたい事は山々ありますが、其れは悉く申上ける事は出来ませぬ。私が奥田の邸に來てる事、又早晚奥田の妻となるべき事も事實です。これだけは私決して隠し立てを致しません。其の理由に至つては貴方の御想像にお任せするより致し方がありません。其の中に機會がありましたら貴方に御話する事も出来ませう。私は貴方にどんなに恨まれどんなに蔑すまれるかといふ事も覺悟の上です。今の處では何も言ふ事が出来ないのですから」

「何を言つてるんだ」と五郎は赫として唇を噛むだ。「矢張り爾だ、賣女め」

「お兄様！私の此の手紙は貴方の心を慰むる事が出来ないで却つて貴方のお怒を増すばかりだらうと思ひます。其れでも私は此の手紙を書かねばなりません。御兄様今一と月の後には何も彼も御解りになります。私の苦しい生涯も其れで終りになります。只だ私は其の前に貴方に御伺ひしたい事があります。御兄様、貴方は私を愛して下さいますか。これだけです」

「何を！」と五郎は唖つた。そして又讀み續けた。

「貴方は私を怒つて被居やる、其れは能く存じて居ます。併し貴方は私を愛して被居やいます。屹度爾です。いくら怒つて被居つても私を愛して被居やるのです。御兄様の愛が通すればこそ私も今日喜んで此の苦勞をして居るのです。御兄様、正直正銘の心を打明けて下さい。私は淋しいのです。私はもう一月と持たない生命です。せめて只だ一言聞きたい。品子僕はお前を愛するといふ一言を聞きたいのです。お兄様、後になると貴方は屹度私を愛すると言つて下さるでせう。私の墓の前で本當の愛を告白して下さい下さるでせう。併し其れでは既に晚いのです。今

の中に私の息の根のある中に私の若い血が身體を循つてる中に私は貴方の御言葉を聞いて御寫眞を胸に抱いて眼を閉りたいのです。今にして思ふと御兄様は餘りに頭が古がつたと思ひます。御兄様は高井さんのために自分の戀を捨てなされた。朝鮮人の血を承けて居るとの理由の下に御自分を卑下なすつた。其んな不自然な事は新人の爲すべき事でないと思ひますわ。愛は人と人との自然の感應で其れを譲つたり譲られたりする事の出来ないものです。そして又愛には人種の差別や國境や身分のあるべき筈がありません。若し私が高井さんと結婚するとしたら、奥田と結婚するも同じではありませんか。愛は只だ一つのものを愛する事なのです。貴方の他にはどんな人をも愛し得ぬのです。それを貴方は貴方の古い頭から私を高井さんに譲らうとなすつた。それがお互の運命の破れの端緒です。御兄様、義理や友情などを議論する時はまだまだ餘裕のある時です。死ぬか生きるかの今身の場合では小さな道徳などは顧みる暇がありません。御兄様も御苦しいでせうが、私の苦みも御察して下さい。私は言ひたくても言へない事があるのです。只だ私を愛すると言仰有つて下さい。奥田の妻となるべきものは愛する事が出来ないと言仰有るなら、昔の小さな妹として愛して下さい。いや、矢張り私を妻として愛し

て下さい。私の言ふ事は、
は貴方のものです。正直に

御兄様、此の手紙は夢の様な手紙で

今充分に説明する事が出来ないからです。御兄様、

した。それから今日までどんなに苦勞をしたてせう。私一人ではありません。高井さんも石尾

さんの菊子さんも未だに朝鮮の空を彷徨ふて居るのです。菊子さんはオペラの群に入つて貴方

の行衛を探して居ます。高井さんと石尾さんは何處に放浪して居るか知れません。それが皆な貴

方のためぢやありませんか、貴方が不自然な事を御考へなさらずに正直に私を愛すると告白し

て下されば何事もなかつたのです。貴方が私を怒りなさる前に貴方御自身が反省なさらなけれ

ばならない事だと思ひます。

御兄様、生意氣な事を申し上げました。併し私の貴方に對する愛は決して少しも變りがないの

です。これだけは神に誓ひます。もう筆が動きません、左様なら御兄様

着物とお金は私が柳小へ贈るのですから、どうか貴方が御叱りにならない様に願ひます。戀

私の身體は他人のものとなつても私の心
の胸に訊いて御覽なさい。

御解りにならないかも知れません。それは

貴方の後を慕ふて去年の春から日本を出ま

一人ではありません。高井さんも石尾

菊子さんはオペラの群に入つて貴方

の行衛を探して居るか知れません。それが皆な貴

方のためぢやありませんか、貴方が不自然な事を御考へなさらずに正直に私を愛すると告白し

て下されば何事もなかつたのです。貴方が私を怒りなさる前に貴方御自身が反省なさらなけれ

ばならない事だと思ひます。

御兄様、生意氣な事を申し上げました。併し私の貴方に對する愛は決して少しも變りがないの

です。これだけは神に誓ひます。もう筆が動きません、左様なら御兄様

着物とお金は私が柳小へ贈るのですから、どうか貴方が御叱りにならない様に願ひます。戀

の晶子からでなく、小さき妹が兄の世話をしてくれる貧しき女への御禮です」

眼を凝らして讀み終つたが五郎には殆んど諒解が出来なかつた。

「何だ生意氣だ」と彼は手紙を回めたが又そろ／＼と擴げ出した。

「愛してくれと言つたつて愛せるもんか、人の妻になる様な奴を誰が愛するか」

彼は呟きながら手紙の文句を拾ひ讀む。

「貴方は貴方の古い頭から高井さんに戀を譲らうとなすつたそれがお互の運の破れの端緒です

……正直に、貴方の胸に訊いて御覽なさい……貴方が私を怒りなさる前に貴方自身を反省な

さらなければなりません……私の愛は決して變りません」

「私の愛は決して變りません」と五郎は繰返した。

「全で女郎の文の様だ」と彼は思つた。が彼はもう一度其れを繰返す中に奇妙な考へが彼の頭

に湧いた。

「僕を愛してるものが何故奥田へ行つたらう。それが根本問題なのに、其れに就ては一言も書いてない。只言ふに言はれぬ事情があると言ふ。事情とは何だ多分其れは……」
 彼は直に解決した。「其れは侯爵の命令なんだから。侯爵の命令にしても其れを拒絶する事が出来ない筈がない。それが薄志弱行のためだ。生命を賭して僕を愛して居ない證據だ。爾だ、確かに爾だ。愛は火の如く熾でなければならぬ。父に背き世に背いても一人の男に従ふてこそ愛が尊きものなのだ」

「憚う考へた時彼の眼に再び觸れた文字がある。御自身を反省なさらなければ……」
 彼は多少反抗の心を以て見やつた。

「僕に何の悪い處がある。僕は彼女の幸福のために高井と結婚させやうとしただけだ」
 憚う打消して霎時凝として居ると柳小が入つて來た。

「御飯は？」

「あ、食べやう」

二人は貧しき膳に對つた。五郎は黙つて箸を動かして居たが臆て柳小に憚う言つた。

「お前はお嫁になりたくないかへ」

柳小はさつと頬を染て、「いゝえ」と首を掉た。

「お前好きな人があるかへ」

柳小は答へなかつた。而して面伏さうに膝を睨めた。

「若しお前に好きな人があるのに、其の人がお前に餘所の友達と結婚しろと勧めたら什麼だ」

「死んでしまひます」と柳小は簡單に言つた。

「併し其人がお前の爲めを思ふて友達の處へ行けと言ふんだよ」

「死んでしまひます」と彼女は再び言つた。

「なぜだ」

「好きな人は一人だけなんですもの」

五郎は黙つた。柳小は食卓を片付け初めた。五郎は猶ほも其儘の姿勢で考へ込んで居たが臆て獨り叫んだ。

「解つた」

「御召びですか」と柳小は聞き違へて入つて来た。

「その着物は着ても可いよ、金もお前にやる。柳小お前は僕に可い事を教へてくれた」
柳小は半ば呆れ半ば驚いたが、五郎の機嫌が直つたのを見て急に元氣づいた。そして臺所へ走り込むや否や唄つた。

「あいよく、あいよく、あいよ」

中に五郎は胸を反らし眼を一方に向けた。その眼は輝いて居た。

「僕が悪かつた。僕は晶さんを愛して居ながら高井に譲つたのは虚偽だつた。女の求むる處は只だ一つの愛なのだ。女は男より純潔だ」

一九

一方に腹立たしき思ひがありながら、晶子の涙に濕つた手紙のはし／＼を思ふと次第に心が弱くなつて見まじとする手紙を二度も三度も繰返して見る。五郎は何となく自分の頭に重い重い雲が重なる様な氣がした。彼はぐる／＼室を歩き出したが又坐り出した。そしてペンを取上

けた。

「晶さん」と彼は書いた。初めは何かしらん亂筆な調子で「お前の様なものから手紙を受くべき筈がないのだ」と書かうとしたが、其れは愚にもつかぬ事だと思ひ直した。

「晶さん、お前の手紙を見た。僕には小さい妹があつたが、其れは遠い過去の事で、小さな妹は大きな虚榮の悪魔となつてしまつたのだ。だから僕は今一言も言ふ事はない。併し僕は自ら反省する事の出来たのはお前の御蔭である事を感謝する。僕は輕率だつた。僕は女の心を知らなかつた。本當の戀を知らなかつたのだ。愛は譲つたり譲られたりするものでない事を初めて覺つた。其のために苦勞したお前に對して厚く謝罪する。」

併しそれほどまでに僕を愛してくれるなら何故奥田の如きものと婚約したか、此の點に就てはお前は一筆も書いて居らぬ。そして其れは祕密な事情だから言へないと言つて居る抑も其の祕密とは何だ。其れが言へないのはお前が僕を愛して居ない證據だ。口先ばかりの愛だ。僕は斷言する。

而してお前は今一と月の後には死ぬだらうと言つて居る。哀れな聲を出して同情を求め低

級な女子の常手段だ。そんな事を言はれると僕は侮辱を感じる以外にお前を憫む念が却つて消滅するばかりだ。

此の二點が明かでない以上は僕は死んでもお前を愛するとは言はん。實際憎みの他に何があらう。お前の愛は二重蓋の愛だ祕密を藏する様な愛が果してあらうか。

僕は今までお前が僕を愛してくれた事を感謝する。併し今日お前は毫頭僕を愛して居ない事を認める。其れだけだ、左様なら

すら／＼と書き終つた五郎は漸く氣が軽くなつた。讀み返して見ると書き足らぬ點が幾らもある。併し彼は疲れて居た。彼は其儘封をして机の上に置いた。

「こんなにするんですか」と柳小は茄子紺の着物を着て糸錦の帯をぐる／＼巻いたもの、結び様を知らないので途方に暮て居た。

「爾ぢやないよ」と五郎は簡單に言つて又晶子の事を考へ續けた。

「何よりも先づ責むべきは此點だ、僕を愛してるものが、何故奥田と結婚するか。これが根本義だ」

「どうするの？先生、どうするの？」

柳小は狎へる様に帯の端をぶら／＼さして身體を揺つた。

「僕にも解らないよ。兩方の端を結ぶんだらう」

「一寸結んで下さい」

「僕は知らんよ」

五郎は冷やかに答へて又復考へ續けた。

「併し元來僕が晶子さんを愛して居た癖になぜ愛を告白しなかつたのだらう。高井と結婚させる方が當人の幸福だと思つたからだ。だが當人は愛より他には何の望みもない。怠け者でも貧乏人でも朝鮮人でも僕と夫婦になれば其れが唯一の望みだとすれば、僕は復女の望む處を與へずに望まざるものを與へやうとした事になる。其れが僕の過失だつた。僕は女の生命は愛である事を知らなかつたのだ」

「これを御覽なすつて、これを」と柳小は叫んだ。ぐる／＼巻いた帯を前で結んで背後へ廻しそして下着の下から長襦袢を五寸ほど開いて見える様に立つて居た。五郎は思はず笑つた。

翌日から柳小は着物を着たり脱いだり、食後の始末をすると直ぐ長襦袢を擴けてにこくし居る。

「お前はそれを着ても外へ出なければつまらないだらう」と五郎は言つた。

「外へ出ても宜うございますか」

「あ、可いとも」

「でも履物が」

「町へ行つて買つて来るさ」

「買つて宜しいんですか」

「あ、可いとも」

柳小は笑を湛へて、「では今晚行つて参ります」

「序に此の手紙を、妹の處へ届けてくれ」

「はい」

柳小は一寸躊躇したが、臆て氣輕に返事した。闇に乗じて行けば人目にかゝる事もあるまい。庭先から窓の下に立つて、三つ程叩けば晶子さまが出て来る。彼女は胸算を決めた。

「御返事は？」

「返事があつたら持つて来い。僕の様子を訊いたら非常に怒つてると言つてくれ」

「でも其那に怒つて被居やらないわ」

「お前に爾見えても僕は肚の中で怒つてるんだ」

「何を怒つて被居るの？」

「もう可い、早く行け」

「では着物を盗まれない様にね」

「可しく安心しろ」

柳小は直に家を飛出した。凡てが計畫通りに行はれた。彼女は昨日の危難をば遠い昔の様に思つた。よしんば目付かつても晶子さまがあるからといふ安心があつた。

窓を静かに開けた晶子は物とした様に微笑した顔を向けた。

「柳さんなの？」

「はい」

「お入り」

柳小は身を躍らして中へ入った。晝と異つて夜は電燈の光が眩く輝いて居た。

「さあ御暖り」と晶子は暖爐の火口を開いて石炭を燻べ、「お前が来るだらうと思つて待つて居たよ」

「どうして？」

「私に解つてるんだもの、して御兄様は？」

「大變に怒つて被居います」

「矢張り怒つてるの？」

「怒つて居ないけれども貴方が訊いたら怒つてると言へど仰有いました」

「まあ」と晶子はニッコリして、

「何か御手紙があるだらう」

「えい、貴方はどうして何でも爾知つて被居るの？」

晶子は答へずに柳小の差出した手紙を受取つて卓子の方へ退つた。どんなに恐ろしい文句があるかも知れない。其の驚いた顔を柳小に見せまいと思つたので、

彼女は丁寧に讀み下した。而して一語々に首肯いた。

「御返事は？」と柳小が訊く。

「一寸待つてね」

晶子は眼の端を紅くして椅子に腰を落とし、白い手を伸ばしてインキ壺の蓋を刎上げた。而して少しく首を左に傾けた。後れ毛がはらくと頬に絡む、彼女はペンを持った手で微かに拂つた。而して両手を口先に組合せて眼を壁の一方に向ける。

「何といふ美しい方だらう」と柳小は思つた。そして赤大根の様な自分の腕や霜焼に掛りかけてる手の甲を睨めて直ぐ袖の中に引込めた。晶子はいつまでも動かなかつた。と兩腕を卓子に突いたまゝ、手を顔に當て泣いて居る。

「あら」と柳小は不思議に思つた。「何を泣いて被居るんだらう。御可愛さうに」
何の理由かは知らぬが、晶子が泣いてるのを見ると胸がいつぱいになつて自分も泣きたくな
る。

「先生が屹と怒つた手紙を書いたんだらう。一體先生が何だつて此那美しい方を怒るんだら
う。これは先生の方が悪いに違ひない。家へ歸つたら談判してやらう」
柳小は慙う思つた。と晶子は長い溜息を吐いた。而して急がしくペンを動かさ急がしく
封をして急がしく此方に向いた。

「お待遠さま、さあこれを持つて行つてね」

柳小は再び窓を降りた。途中まで来てから急に想ひ出した。
「帯の結び方を聞くのを忘れた」

柳小は足を急がして家路に就いた。五郎は眠らずに待て居た。

「早かつたね」

「えい、急いで来ましたから」

柳小の差出した手紙を見て五郎は直ぐに封を切た。そして讀み下して居る中にさつと顔が紅
くなつた。

「馬鹿ツ~~~~全然要領を得ない」

嘴み付く様に怒鳴つて五郎は手紙を寸々に裂いた。而して「何をぼんやりしてゐるんだ」と怒
鳴つた。柳小は吃驚して自分が睨めて居た繻絆を引込めた。

「何をぐづぐづしてゐるんだよ、寝る様に支度をせんか」

「はい〜」と柳小は床の上に毛布を敷いたり蒲團を伸ばしたりした。そして恐々ながら五郎
の方を見やると五郎はころりと横になつて居た。

「風邪を引きますよ、先生」と柳小は聲を掛けた。返答がない。

「轉寢をなさると風邪を……」と柳小は又言つた。彼女は五郎の機嫌の悪いのを見て傍に近附
く事は出来なかつた。そして遠くから、

「先生く」と聲を掛けたが矢張り返答がない。寒い風が壁を漏れて針の如く吹いて来る。先生く」

柳小は恐さを俵へて揺り起した。五郎はぱつと眼を開いたが直横を向いた。眼に涙が湛つて居た。

「御寝みなさい先生」

五郎は直ぐ跳り上つて床に入つた。霎時茫然と坐つて柳小は両手を胸に組んだ。彼女の産が段々と低れた。をして一滴二滴。涙が膝の上へ落ちた。

何を怒つて被居るんだらう。御嬢様の手紙を御覧になるなり急に機嫌が變つた。一體此の御兄妹はどうして恚う離れんくになつてゐるんだらう。何にしても御手紙の度毎に私が叱られる様ではいつそ御手紙の御使をしない方が可い」

柳小はこそくと室の隅に床を設けて枕に就いた。彼女はうとくと眠つた。ふと眼を覺まして五郎の方を見やると五郎は未だに眠らなかつた。折り／＼深い溜息が聞えた。柳小は悲しくなつた。

翌日は五郎は一言も言はなかつた。そして何となく苛々して小さな事に腹を立て、室内をぐるぐる歩き廻つた。夜も矢張り一言も言はなかつた。柳小は淋しさに泣き明した。其の翌日、朝日がぼか／＼と窓から射す頃五郎は漸く眼を覺ました。

「柳小」と彼は呼んだ。臺所に居た柳小は恐る／＼出て來た。其の顔は蒼白めて眼は濡み唇は顫へて居た。

「お前顔色が悪いがどうかしたのか」

「い、え」と柳小は唇を嚙んで下を向いた。

「でも大變に顔色が悪いよ」

「ゆうべ眠らない故でせう」

「なぜ眠らない」

柳小は答へずに室を出てしまつた。

「何だ」と五郎は忌々しさうに舌打して「おい、飯を早くせんか」

「はい」

食卓に椀や茶碗を運んで、きちんと傍に腰を下ろす。

「おいお前のは什麼した」

「私はあとで」

「慙う言つた時、彼女の眼から涙が落ちた。」

「どうしたんだ」

柳小はずん／＼室を出た。

「勝手にしろ」

五郎は慙う言つて自分で手盛の飯を済ました。併し柳小は來なかつた。彼は耳を欬だてたが音もない。

二二

「柳さん／＼」と呼んだ。矢張り返事がない。五郎は起つて臺所へ行つた。薄く日の射す竈の前に柳小はきちんと跪まづいて一心不亂に神棚を拜んで居る。そして何か口に言つては泣き泣

いては又祈る。背後に下げた髪は地に届いて青い服を着た兩肩は柔かに未だ少女の幼々しさを有つて居る。そして泣く度にふつくりした兩頬が動いた。棚の上に載せた瓶や壺や鍋の様なものも其れ／＼に朝日を受けて奇妙な影を落して居ると其れが燻ぼつた壁の色に紛れて寒い闇の中に柳小の身體がいかにも淋しさう。

「僕は悪かつたよ柳さん」と五郎は背後から肩に手を置いた。「許してくれ柳さん。お前に何の罪もないのだ」

柳小は静かに首肯した。而してわつと聲を擧げて泣いた。

「お前は淋しかつたらう。此の家に住むものはたつた二人だ。いや此の全世界の中で僕の友であり妹であるものはお前一人なんだ。其れを僕が自分の氣儘から一日でも不愉快な思ひをさせたのは僕が悪い。柳さん、許してくれね。可いかい、ね、ね柳さん」

「はい」

「機嫌を直してね」

「はい」

「声が段々低くなると泣聲が又も激しくなる。

「さあ機嫌を直してね、今日は大いに遊ぼう。お前の唄は何だつけな、あいよくあいよくあ
いよかへ」

柳小は笑つた。そして五郎の手を確乎と握つた。

「先生、私はもうお嬢様の御使に行きませんわ」

「なぜだ」

「お嬢様の御手紙のない中は先生はいつも私を可愛がつて下さいましたが、あれからといふも
のは……」

「あ、く、解つたよ」と五郎は笑つて「もうあんな奴に用がないよ」

二人は室へ入つた。

「私ね、御飯を食べずに死なうと思ひましたのよ」と柳小は笑つた。

「食べなかつたのかへ」

「えい、昨日は一日一ぱい」

「道理で變だと思つたよ、そんな馬鹿な事をするものでないよ」

「でも一時間でも先生の怒つた顔を見ると死んでしまふ方が可いんですもの」

「お前ほど僕を思つてくれるものは天下にないね」

柳小は頬を眞赤にして俯向いた。再び顔を舉げた時に彼女の眼は美しく輝いて居た。五郎は
柳小に日本着物の着やうや帯の締め方を能く教へた。

翌日も翌々日も二人は楽しく暮した。三日目頃から五郎の顔が折りく曇つた。そして「馬鹿
馬鹿」と自分を嘲る様な又人を罵る様な獨り語が初まつたそして柳小が心配さうな顔をし
て見詰めてるのを見ると、直に「心配するなよ、何でもないんだから」と慰める様に言つた。

併し其翌日彼は柳小に慙う言つた。

「柳さん、何處かへ行かうか。平壤は厭になつた」

「えい、温泉へ参りませう」

「爾だね、そしてお前と二人で旅から旅へと放浪するんだね。丁度あの白い雲の様……」
「えい参りますわ。新義州に御父さんが居ますから」